第四紀研究　第 64 巻　第 4 号　付録　　ISSN　1341-724X

# QR Newsletter

# 第四紀通信

*Vol. 32 No.4, 2025*

上空から撮影したグリーンランド。グリーンランド氷床をたたえる北半球は、第四紀を特徴づける地球の姿である。今、地球温暖化により、その消失を懸念する科学者も多い。その消失に向かうティッピングポイントは最短で 2030 年頃にある。私たちの世代で第四紀を終わらせるのかそうでないのか、その選択に今迫られている。2022 年 11 月 6 日撮影（文・写真：加　三千宣）

**Vol. 32 No. 4**　　**November 1, 2025**

会長就任挨拶 ..... 2
副会長就任挨拶 ..... 3
2025 年大会開催報告 ..... 5
大会プレ巡検報告 ..... 6
大会ポスト巡検（大山）報告 ..... 7
大会ポスト巡検（たたら）報告 ..... 8
学術賞受賞者の言葉 ..... 10
若手学術賞受賞者の言葉 ..... 13
論文賞受賞者の言葉 ..... 13
奨励賞受賞者の言葉 ..... 15
評議員会議事録 ..... 17
総会議事録 ..... 19
執行部会議事録 ..... 28
2026 年大会案内（第 1 報）..... 30
JpGU2026 のお知らせ（第 1 報）..... 30
紙碑 ..... 31
学会賞・論文賞等推薦のお願い ..... 32
会員消息 ..... 32

**日本第四紀学会**　**Japan Association for Quaternary Research**

## ◆会長就任挨拶　　北村晃寿

この度、2025・2026 年度の日本第四紀学会会長を務めることになりました北村晃寿です。2017 ～ 2020 年度は齋藤文紀会長のもとで編集委員長として「第四紀研究」の刊行を担当し、2021 ～ 2024 年度は鈴木毅彦会長のもとで須貝俊彦会員とともに副会長を務め、「執行部会・常設委員会のとりまとめ」を担当しました。

2025・2026 年度の副会長には、「執行部会・常設委員会のとりまとめ」に藤原　治会員に、「領域のとりまとめ」に横山祐典会員に就任いただきました。藤原会員は 2013 ～ 2016 年度に編集幹事、2017 ～ 2020 年度に行事委員長を務められ、本会の会務に精通しています。さらに、2024 年に設置された学会設立 70 周年記念事業委員会（委員長は鈴木前会長、以下では記念事業委員会）の委員を担当しております。来年の 70 周年大会は産業技術総合研究所地質調査総合センターで開催し、藤原会員は同センターの副総合センター長ですから、70 周年大会の円滑な運用に最もふさわしい方です。横山会員は、2019・2020、2023・2024 年度の領域 1 の代表で、海洋コア岩相記載武者修行イベントを立ち上げられました。また、国際第四紀学連合（International Union for Quaternary Research）の研究委員会諮問委員を務められています。そのため、領域のとりまとめと国際対応に最もふさわしい方です。

藤原・横山両副会長ならびに齋藤めぐみ庶務委員長をはじめとした執行部会の皆様とともに、2025・2026 年度の業務を遂行していき、特に情報ネットワークを積極的に活用し、会務の軽減化に努めるとともに、情報発信力の強化を図りたいと考えております。

さて、今期の最重要事業は、学会設立 70 周年記念事業で、主な事業は 70 周年大会、特別展、記念出版物の刊行となり、記念事業委員会の主導で準備が進められています。大会は、2026 年 8 月 20 ～ 22 日に開催されることが決定されており、内容の検討が進んでいます。特別展は大会期間中に地質調査総合センターの地質標本館で第四紀学に関連する展示を行うことで検討が進んでいます。記念出版物は、朝倉書店より「図説 日本列島の歴史：第四紀の人と環境（仮）」を 70 周年大会時に出版済みとする予定で順調に進んでいます。

ところで、2020 ～ 2024 年に、世界の年平均気温は 0.5℃も上昇し、2025 年夏（6 ～ 8 月）の日本の平均気温は基準値（1991 ～ 2020 年の 30 年平均値）からの偏差は +2.36℃で、1898 年の統計開始以降、2023 年および 2024 年を上回り最も高い値となりました。このように、温暖化については、我々は常時、未知の領域を経験していることになります。また、2021 年 7 月 3 日には熱海市で豪雨に伴う盛土崩壊による土石流が発生しました。2024 年 3 月 20 日に、国際地質科学連合において、人新世が正式な地質年代単元として否認される一方、人間活動による地球環境への影響は増大の一途をたどっています。その上、2024 年 1 月 1 日には能登半島地震が発生しました。このように自然現象と人間活動が複雑に絡み合う現代の災害に対する防災・減災に資する第四紀学の調査研究は、極めて有益で重要な知見を社会に提供できますので、日本第四紀学会に課せられた社会的責務は、これまで以上に大きなものとなっております。

会員の皆様におかれましては、通常の学会活動へのご協力に加え、来年の 70 周年記念事業に積極的にご参加いただき、ともに本学会の社会的使命を果たしてまいりたいと存じます。引き続きのご理解とご支援を心よりお願い申し上げます。

## ◆副会長就任挨拶　　藤原　治

このたび、副会長を務めることになりました産業技術総合研究所地質調査総合センターの藤原治です。北村会長、横山副会長はじめ役員の皆様とともに学会運営に微力を尽くす所存ですので、よろしくお願いします。この4年間は学会執行部から離れていましたが、以前には行事委員長や編集幹事を経験してきましたので、その学びを活かしながら、少しでも学会の発展に貢献できればと思っています。

いまの科学の世界は、少子化の影響や研究費の減少など、難しい課題を抱えています。しかし一方で、第四紀に関する研究は、人類の暮らしを支える自然を理解し、持続可能な社会をつくっていくために欠かせない多くの分野と関わっています。だからこそ、日本第四紀学会が科学の可能性を広げ、社会の中で役立ち続ける存在であることが大切だと考えます。

私は、本学会には約30年前に加えて頂き（初めての大会参加は1993年福岡大会と記憶します）、過去の地震・津波イベントや環境変化などを堆積物から解読する研究をしてきました。津波堆積物の研究は1996年に初めて学会発表してから、私の長年の研究テーマとなりました。30年前は津波堆積物の研究者は殆どいませんでしたが、その後、2004年スマトラ島沖地震（インド洋大津波）や2011年東北地方太平洋沖地震と大地震のたびに研究者が急激に増え、様々な研究発表が行われ、防災分野で第四紀学の成果が生かされているのは印象的でした。

私の副会長としての役割は、主には2つあると思っています。一つは、もちろん、会長を補佐しつつ先に述べたような課題に貢献できる学会運営を行うことです。もう一つは、学会設立70周年という大きな節目に、その記念となる大会をつくば市で開催することです。

日本第四紀学会の大会は、第四紀学分野において極めて重要な役割を果たす場です。単に研究成果を発表するだけではなく、特に若手研究者（現在はEarly Career Researcherと呼ばれる世代）にとってはキャリアを築き、発展させるための学際的なネットワークを形成する貴重な機会となります。また、第四紀学コミュニティの多様な業績に触れ、先人の歩みに学びつつ、その功績を称えることも本大会の大きな意義です。さらに、第四紀学を牽引する研究者が集結し、最新の科学的知見を共有するとともに、今後の研究の方向性を議論することで、学術分野の未来を切り拓く場としての役割を担っています。

会場となるつくば市は都心から少し距離がありますが、世界的にも注目される研究学園都市として、最先端の研究機関が集積し、豊かな自然と共存する魅力あふれる環境にあります。こうした環境は、落ち着いた雰囲気の中で交流や議論を深め、研究の新たな発展を生み出すのに最適です。学会執行部や行事委員会の皆さんと力を合わせ、70周年という節目にふさわしい実りある大会を成功へと導きたいと思います。どうぞお気軽にお声がけいただき、ともに学会活動を盛り上げていければ幸いです。

## ◆副会長就任挨拶　　横山祐典

このたび、日本第四紀学会の副会長を拝命いたしました横山祐典です。北村会長、藤原副会長とともに、本学会がさらに活発で魅力あるものとなるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、地球環境はこれまでにないスピードで変化しています。気候変動や地球温暖化、頻発する自然災害、さらにはエネルギーや資源をめぐる課題など、私たちの暮らしと地球の未来を左右する問題が山積しています。こうした中で、第四紀学が扱うテーマはまさに社会の要請と直結しており、学術的にも実社会的にもその意義が一層高まっていると感じます。

第四紀学会の研究対象とする時代は、過去258.8万年間という壮大なスケールを持ち、人類の誕生から現在に至るまでの地球環境の変遷をカバーしています。気候や環境の変化と人類の進化・文化発展の関係を考えることは、過去の理解にとどまらず、将来の環境変動にどのように向き合うべきかを考える上でも大きな示唆を与えてくれます。この意味で、第四紀学会は“過去から未来をつなぐ”学会といえるでしょう。

私自身は領域1の気候変動と海洋のプロセスを専門としていますが、学会には、陸上環境（領域2)、年代・層序（領域3)、人類史や生物圏の変動（領域4)、さらに自然・文化遺産や災害・応用地質など現代社会と関わるテーマを扱う領域5があり、地球表層環境のほぼすべてを対象にしています。このように幅広い分野をカバーし、地球と人類の関わりを総合的に探ることができるのは、第四紀学会の大きな魅力です。

今後は、学術成果を社会にわかりやすく伝えていくことがますます重要になると思います。学会誌『第四紀研究』をさらに充実させるとともに、ウェブサイトやSNSなどを通じて最新の研究成果を発信していくことで、学会の活動をより多くの方々に知っていただければと思います。その際には、編集委員会や担当幹事の皆さま、そして会員の皆さまと力を合わせて進めていければと考えています。

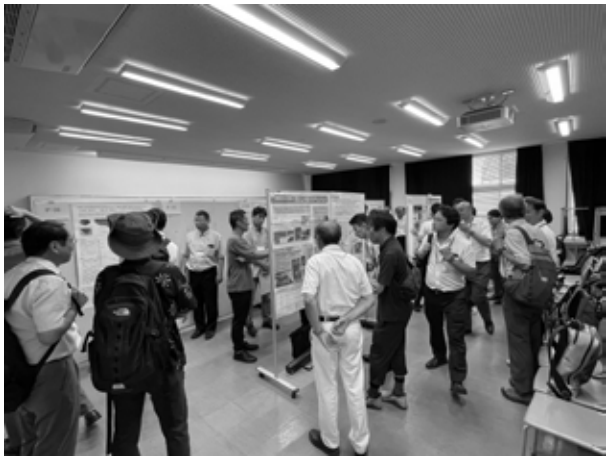
また、若手研究者の育成も大切な使命です。為替や経済情勢の影響で海外での研究活動が難しくなっている状況もありますが、国際学会での発表や研究交流の機会を支援し、次世代の研究者が世界で活躍できる環境を整えていきたいと考えています。同時に、国内で国際ワークショップや研究集会を開催し、海外の研究者と直接交流できる場を日本で広げていくことも重要です。特にINQUA（International Union for Quaternary Research）との連携を一層深め、国際的なネットワークの中で日本の第四紀学が存在感を発揮できるよう取り組んでいきたいと思います。

各領域には活動費が配分されていますので、領域幹事の方々と連携しながら、研究推進や交流のために積極的にご活用いただければ幸いです。私も微力ながら、学会の活動がより活発に、そして楽しく進んでいくよう力を尽くしてまいります。

会員の皆さまとともに、第四紀学会がこれからも社会に貢献し、次の世代へと知のバトンをつないでいけるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

## ◆日本第四紀学会 2025 年大会報告

齋藤文紀（2025 年大会実行委員長）



大会主会場とポスター会場の様子（池原　実氏撮影）

日本第四紀学会 2025 年大会は、島根大学との共催により、2025 年 8 月 28 日から 9 月 1 日まで、島根県松江市の島根大学松江キャンパスを中心に開催された。大会初日の 8 月 28 日には、研究発表に先立ち、専門巡検 1 件と評議員会が実施され、最終日の 9 月 1 日には、さらに 2 件の専門巡検が行われた。合計 3 件の巡検には全国から 30 名が参加し、会場での参加者と合わせて総勢 167 名が来場した。

研究発表は対面形式で行われ、評議員会および総会はオンラインとのハイブリッド形式で開催された。研究発表は 8 月 29 日・30 日に実施され、大学ホールでは口頭発表 31 件、隣接する教養講義室棟 1 号館ではポスター発表 28 件が行われた。300 席以上を有する大学ホールでは、ゆったりとした空間の中で活発な議論が交わされた。今回から、共著者に会員が含まれていれば、非会員の学生・院生による発表が認められるようになり、開催校である島根大学の院生も発表に参加することができた。この制度変更をご検討いただいた執行部会の皆様に感謝申し上げます。

ポスター発表が行われた教養講義室棟 1 号館では、企業展示 3 件と休憩室が設置され、参加者の交流の場となった。30 日午後には総会と授賞式が行われ、その後、大学ホール隣の学生食堂「Nicora」にて懇親会が開催された。懇親会には 70 名が参加し、日本酒発祥の地・島根の地酒 5 升が振る舞われた。

8 月 31 日には、「出雲平野と宍道湖の歴史」をテーマに、午前に公開シンポジウム「後期完新世の気候変動と人間活動の影響をさぐる」、午後に普及講演会「縄文時代から現代に至る出雲平野・宍道湖の移り変わり」が開催された。これは、領域 1（気候変動および海洋の諸プロセス）と領域 4（人類と生物圏）の合同企画であり、古気候学・古環境と考古学の関連に焦点が当てられた。午前に 4 件、午後に 2 件の研究成果が発表され、活発な質疑応答が行われた。このシンポジウムは、島根大学エスチュアリー研究センターと総合博物館の共催のもと、島根考古学会、島根県地学会、島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会の後援を受け、地元からも多くの参加者を迎えることができた。

地方開催となった今大会では、より多くの方々に島根を知っていただきたく、3 件の巡検、8 月 28 日の専門巡検 1「松江周辺の植生」（日本植生史学会との共催）、9 月 1 日の専門巡検 2「大山東麓・南麓のテフラ」と専門巡検 3「三瓶小豆原埋没林とたたら」が実施された。

大会の実施にあたり、巡検案内や講演など、非会員の方々からも多くのご支援をいただきました。発表者を含め、ご参加・ご協力いただいたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

## ◆日本第四紀学会 2025 年大会専門巡検報告「松江周辺の植生」

鳥井夏希（島根大学大学院 自然科学研究科博士後期課程）

2025 年大会専門巡検が、日本植生史学会との共催で「松江周辺の植生」というテーマで 8 月 28 日に開催された。案内は島根県立三瓶自然館 井上雅仁氏、島根大学エスチェアリー研究センター 渡邉正巳氏にしていただき、サポート 1 名、参加者 5 名の総勢 8 名で巡検を行った。

巡検のコースは松江駅集合→田和山史跡公園→松江駅周辺で昼食→枕木山・華蔵寺→松江駅解散であった。

はじめに、田和山史跡公園を訪れた。田和山史跡公園は、弥生時代の集落跡を現地保存した「田和山遺跡」と、森林部分の「田和山の森（自然学習の森ゾーン）」からなる。田和山の森の一部は、かつてはスギ・ヒノキの植林地であったが、長い間放置されたことで、竹が繁茂し、多くの樹木が枯れていた歴史がある。この森を再生するために、地域住民を中心として「里山を育てる会」が結成され、「里山」の保全活動が進められてきた。この結果、現在の田和山の森では、多様な植生を観察することができた。上層はスギ・ヒノキを中心に、タブノキ、コナラ、スダジイ、アラカシ、クスノキ、ノグルミ等がみられ、下層や林床には、サカキ、ヤブツバキ、シロダモ、ヤブコウジ、ベニシダ等をみることができた。参加者たちは井上氏の解説に熱心に耳を傾けながら、植物の観察や、写真の撮影を行った。

田和山の森を観察の後、小高い丘の上に位置する田和山遺跡に移動した。巡検当日は、気温 30℃を超える酷暑であったため、日差しを遮るものがない田和山遺跡では、短時間で観察を行った。田和山遺跡の頂上には大社造りと呼ばれる 9 本の柱からなる建物跡や、山頂を囲むように掘られた 3 本の堀を観察した。これらの遺構から、田和山遺跡は祭祀遺跡と考えられている。また、丘の上からは宍道湖や北山、松江市街を眺望でき、記念撮影を行った（写真 1）。

その後、駅周辺で松江・出雲地域の名物である出雲そばを食べ、松江市街の様子をバスの中から見ながら、枕木山・華蔵寺へ向かった。枕木山は島根半島東部に位置し、標高 453 m。宍道湖北山県立自然公園の一部に指定されており、華蔵寺は枕木山の頂上付近に位置している。華蔵寺参道手前の駐車場に車を停め、参道を登って行った。参道入り口右手（谷側）にはスギ･ヒノキ林が広がっており､参道左手（山側）にはスダジイ､アカガシ、ウラジロガシなどの常緑広葉樹林を観察することができた。参道を登っていくと、中腹には運慶作と云われている仁王像と仁王門があり、手前にはスダジイの大径木が見られた（写真 2）。仁王門を過ぎると、参道の山側に石造りの不動明王像を見ることができ、高さ 9 m もある大変立派な石像であった。斜面にはスギの植林の中に、スダジイやアカガシ、ウラジロガシが混生していた。参道を上がり、樹高 20 m に近いモミの大木を見ながら、展望台へと向かった。展望台からは中海、大根島、江島、弓ヶ浜半島を眺望でき、江島、本庄水域の干拓の歴史や大根島の歴史について渡邉氏に解説していただいた。その後、境内に入り、ご住職さんから美味しいお抹茶とお菓子をふるまっていただき、華蔵寺の由緒や山の上での大変な生活の様子をお聞きした。一服の後、一行は本堂裏から美保関千酌へと続く遊歩道の途中まで下っていった。そこでは、冷温帯に生息するテツカエデを観察することができ、隠岐諸島や島根半島桂島の植生と

写真 1　田和山遺跡山頂から撮影した記念写真

写真 2　仁王門前にて参道を登っていく様子

同様に、最終氷期の植生の名残であると説明された。

今回の巡検では、井上雅仁氏と渡邉正巳氏による丁寧かつ詳細な解説・案内によって、松江周辺の植生と植物の生態、人の活動を五感で体験することができた。巡検日は30℃を優に超える酷暑であったが、案内の方々の細やかなお気遣いにより、体調不良者を出さずに楽しく巡検を終えることができた。案内者の井上氏、渡邉氏及び関係者の方々に深く御礼申し上げたい。

## ◆ 2025年大会専門巡検「大山火山東麓・南麓のテフラ」に参加して

一井　新（山口大学理学部4年）

「大山火山東麓・南麓のテフラ」をテーマにした専門巡検は、9月1日に実施された。案内者は鳥取地学会の石賀　敏氏および島根大学エスチュアリー研究センター、文化財調査コンサルタント株式会社の渡邉正巳氏である。参加者は15名で、企業関係者から大学教員、学生まで幅広い層が参加した。集合は8:00に松江駅南口であった。移動には2台のレンタカーを使用し、6か所のテフラ露頭を観察した。

各地点での内容を記す前に、大山火山の概要について簡単に述べておく。大山火山の活動期間は約100万年前から2万年前とされ、約35万年前までを古期、それ以降を新期と区分されている。さらに、新期大山のテフラ層序は古いものから順に最下部、下部、中部、上部に区分される。本巡検で観察したテフラはすべて新期大山のものにあたる。

地点1は、高さ約6 mの大露頭がある鳥取県倉吉市般若西である。ここは、bvsからhpm1まで、大山最下部テフラ層のほとんどを連続的に観察できる唯一の場所である。さらに、この露頭が面する坂道の上方には、高さ約5 mの露頭がある。そこは、大山最下部テフラと、ATと、それに重なる大山上部テフラが観察できる。この約5 mの露頭は、大山下部テフラと大山中部テフラが完全に欠如している。現地では、この不整合について議論になった。

写真1　大山池の露頭（左の人物は案内者の石賀　敏氏）

地点2は、倉吉市大山池である。この池の正式名称は「狼谷ため池」であるが、水面に大山が映る姿から大山池と呼ばれる。ここは水位の関係で、9月から11月の時期でのみ観察が可能となる。多くの大山テフラの分布主軸がこの付近を通るため、地点1で見られた最下部テフラおよび上部テフラに加え、下部、中部テフラもすべて観察することができる。さらにここでは、Aso-4など多くの広域テフラが検出されている（写真1）。

地点3は、岡山県真庭市蒜山宮城である（写真2）。この露頭は高さ約5 mの大露頭である。最下部テフラから上部テフラまでが、部分的に欠けるがほぼ連続的に観察できる。ここは、最下部テフラのDOPおよびDBPの分布主軸が近く、それぞれの層厚は2 mを超える。また、ここではAso-2、Aso-3、SK、Ata、K-Tz、Aso-4、ATなど多くの広域テフラが検出される。しかし、Aso-2および

写真2　宮城露頭での集合写真

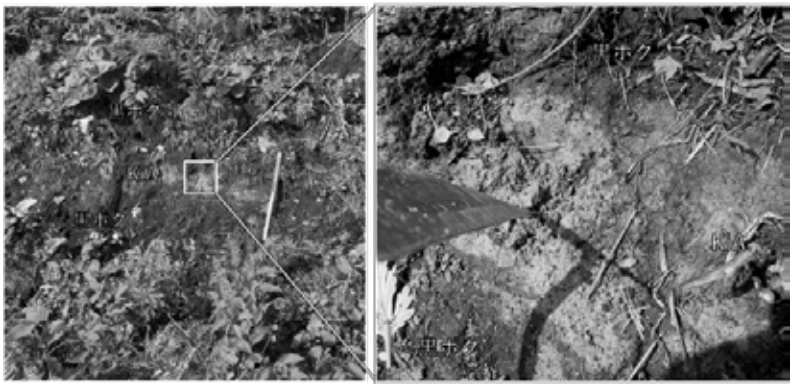


写真 3　キリン火山灰露頭
（左が全景，右が近影）

Aso-3 については現在、層としては確認されていない。

次は、当初は計画されていなかった KiA（キリン火山灰）の露頭を案内していただいた ( 写真 3)。これは石賀氏が発見した大山火山の完新世活動を示唆する火山灰である（奥野ほか，2025)。現地では、黄土色の KiA が明確に黒ボクに挟在する産状が確認できた。

地点 4 は、鳥取県江府町笠良原である。ここは笹ヶ平火砕流からなる台地上に位置する。笹ヶ平火砕流は、AT 直後に噴火した烏ヶ山溶岩ドーム形成に伴った火砕流である。そこで、笹ヶ平火砕流の上位の大山上部テフラを観察した。その後、約 15 m 標高の低い地点へ移動し、笹ヶ平火砕流の断面を観察した。この火砕流は従来､典型的なブロックアンドアッシュフローと記載されていた。しかし、今回の観察により、火砕流の上部で軽石に富む部分が確認された。これによって、軽石流の存在や従来の火砕流の噴出量の妥当性などについて議論が行われた。

最後の地点は、鳥取県伯耆町福岡原の道路沿いの露頭である。ここでは、大山の降下軽石のうち、唯一、分布主軸が西方へ向いている大山下部テフラの DMP を観察した。地点 5 が分布主軸付近であるため、露出部分だけでも層厚が 2 m 以上ある。DMP が非常に厚いテフラであることが実感できた。

本巡検のコースは、主要な大山テフラをほぼすべて網羅する、大変充実したものであった。多くの降下軽石層を観察したことで、大山がこれまで数多くのプリニー式噴火を引き起こしてきた活発な火山であったことが実感できた。筆者は現在、大山を研究しており、今回の巡検で大山テフラの層序を改めて体系的に理解することができた。今回、巡検の企画、案内をしていただいた方々に深く感謝いたします。

引用文献

奥野　充・石賀　敏・中岡礼奈・Auer Andreas・小林哲夫（2025）大山火山の完新世噴火活動. 日本第四紀学会講演要旨集，no.55，p.13.

## ◆ 2025 年大会専門巡検報告「三瓶小豆原埋没林とたたら」

高橋未央（岩手大学）

日本第四紀学会 2025 年大会における専門巡検 3 は、「三瓶小豆原埋没林とたたら」をテーマに、9 月 1 日（月）8 時に松江駅前を出発し、大田市さんべ縄文の森ミュージアム、奥出雲町福頼の棚田展望台、羽内谷鉱山鉄穴流し本場、安来市和鋼博物館を経由する約 210 km の移動距離となった。本巡検は、島根大学の齋藤文紀先生にご案内をいただいた。

最初に到着した「さんべ縄文の森ミュージアム」では、水田の下から現れた三瓶小豆原埋没林の観察を行い、三瓶自然館の中村唯史氏から解説をいただいた。三瓶山は、7 回の火山活動により現在の形になったとされ、ここで発掘された埋没林は、約四千年前の三瓶山の火山活動時に、いくつかの地形要因が重なることで、小豆原に形成されたと考えられている。地下に展示されている埋没林は、立木のまま並び、当時の原始の森を彷彿とさせる圧巻の迫力であった。発掘された時の状態の横倒しになった埋没林の展示もあり（写真 1)、間近で年輪や樹皮を観察することもできた。埋没林を覆う火砕流堆積物などの地層の剥ぎ取り標本の展示も豊富なうえ、展示の仕方も工夫が凝らされていて、好奇心をかきたてるものとなっていた。中村氏からは、埋没林に関する専門的な解説に加えて、展示に関わる運営事情についてもお話を伺うことができた。

写真 1　埋没林の形成について解説をする中村氏

次に、たたら製鉄によって生みだされた棚田を一望できる展望台へ向かった。奥出雲地方のたたら製鉄は、砂鉄採取のために切り崩した山を棚田に変えて稲作やソバの栽培を行い、製鉄の燃料となる木炭も三十年周期で利用する資源循環型農業である。その結果、たたら製鉄は、一石二鳥にとどまらない生産性をもち、約三百年間も続いた、とされる。展望台からは、ちょうど黄金に色づく稲穂が晴天とも重なり、美しい日本の原風景が広がっていた。この棚田では、ブランド米の「仁多米」が栽培され、その産地としての基盤が築かれていることや、棚田の中でみえる古墳のような残丘は、鎮守の杜や墓地など信仰対象となる地形が手つかずのままにされているという解説をいただいた。

次は、山間の細い谷の中に位置する羽内谷鉱山鉄穴流し本場へ向かった。「本場」とは、鉄穴流し最終工程で砂鉄が精選される場所である。ここでは、昭和 47 年まで実際に鉄穴流しが行われ、1 日 2 ～ 4 トンの砂鉄を採取していた、とされる。土砂を流す側溝の側面に一定の間隔で入る溝から、板で仕切りながら作業した当時の様子が想像されたり（写真 2）、どの地点から川の水を引き入れていたのかといった、参加者同士での議論もあった。

写真 2　本場の水路

最後は、安来市和鋼博物館を訪れた。ここでは、たたら製鉄で実際に使われていた道具や模型によるたたら製鉄の行程、日本刀の展示、製鉄業で発展した安来市の街の変遷についての展示を見学した。屋外には、たたら製鉄で最終的に取り出される「鈩（けら）」が年代別に展示されていた（写真 3）。ほかに、映画「もののけ姫」の一幕にもある天秤鞴を踏む作業や、窯に空気を送る吹付作業などのたたら製鉄の一部の行程を体験することが可能となっており、巡検参加者も積極的に鞴を踏んで、昔ながらの製鉄業の労力を体感していた。館内を一巡することで、本日のこれまでの現地観察の内容が繋がり、島根県の鉄づくりの把握が促された。

本巡検では、縄文時代の巨木林の形成史に始まり、自然と共生する持続可能な人々の暮らしについて学ぶことができた。巡検の経路は、奥出雲をぐるりと一周する大移動となったが、案内者の齋藤先生が、車窓より見える風景から様々な解説（神戸川の上・中流部からは下流部に広がる出雲平野の形成、家々の赤い瓦から石州瓦、宍道湖からシジミの成長と海流の関係など…）をくださったため、車内でも多くの学びを得ることができ、島根県の地域性に関心が深まったと感じた。今回訪れた奥出雲は、たたら製鉄の伝統が評価されて世界農業遺産の認定を受けた直後であったため、話題性も非常に高く、巡検参加者も知的好奇心が尽きない様子で、多くの質問や議論がされていたことも印象的だった。改めまして、ご案内くださった齋藤先生、中村氏に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

写真 3　鈩（1981 年製）の解説をする齋藤先生

## ◆学術賞　受賞者の言葉　　苅谷愛彦（専修大学文学部）

件名：日本アルプスを中心とする高山地域における地形形成過程に関する一連の研究（Studies on geomorphological processes in and around the Japanese Alps）

このたびは日本第四紀学会学術賞受賞の栄誉にあずかり、身に余る光栄に存じます。ご推挙くださった方々、ならびに審査に関係された皆様に、紙上をお借りして心より感謝申し上げます。

私の地形研究の始点は、1990 年代初頭にさかのぼります。関東山地南部で岩塊集積地形（岩塊流）の分布と年代を調査し、従来の更新世周氷河成因説に対して完新世非周氷河説を提唱しました。同時に、月山や平標山など日本海側多雪山地を対象に、周氷河地形（残雪凹地）の発達史の解明や野外実験にも取り組みました。博士論文にまとめた多雪山地の気候地形研究は町田　洋・岩田修二・平川一臣各先生をはじめ、東京都立大学地理学教室の諸先生によるご指導の賜物です。また、当時活発だった寒冷地形談話会の活動を通じて得た議論と人脈は、今日まで続く貴重な財産となりました。

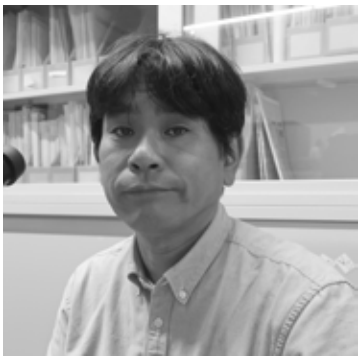
1996 年、工業技術院地質調査所地震地質課へ赴任し、全国の活断層調査に携わるなかで、未経験であった変動地形学の実務を学びました。課員・所員の皆様の支えのもと、第一級の研究環境で経験を積み、視野を広げる絶好の機会を得ました。また 5 万分の 1 地域地質図の作成業務を担当し、「立山」・「白馬岳」両図幅の調査に関われたことは大きな転機となりました。とりわけ雲上の地すべり地ともいえる白馬岳長池平との邂逅は、その後 25 年以上にわたる研究の出発点となり、今回の受賞へとつながったように思います。

2000 年に千葉大学、2007 年に専修大学に移って以降は日本アルプス全域で調査を重ね、氷河地形の再検証や編年、大規模地すべりの高精度年代決定などを進めてきました。これらは泥と汗にまみれた自身のフィールドワークを基盤としていますが、地形判読・宇宙線生成核種年代測定・樹木年輪酸素同位体比編年・$^{14}$C 年代測定などは、多くの共同研究者と学生の協力で推進できたものです。これらの方々との協働なくして成果を上げることはできず、今回の誉れは共同受賞に等しいものと感じています。深く御礼申し上げます。

学際的な第四紀学との出会いは、山の自然の見方や好奇心の方向性をいっそう多様なものにしてくれました。そのおかげで、これまでも、そして今も、山の研究と楽しく向き合うことができています。一方、5 年前に『第四紀研究』（第 58 巻第 1 号）で研究のレビューをまとめた際、研究者や論文の減少に懸念を抱きました。確かに山のフィールドワークは効率が悪く、危険も伴いますが、この分野には未解明の課題がなお山積しており、独創的で新しい知見を得る好機に満ちています。今後、新たな挑戦者が現れることを期待しています。お手伝いできることがあれば、労を惜しまず尽力する所存です。今後とも、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、お願い申しあげます。

## ◆学術賞　受賞者の言葉　　里口保文（滋賀県立琵琶湖博物館）

件名：日本列島における後期鮮新世～中期更新世広域火山灰の層序確立に関する一連の研究（Studies on the establishment of the stratigraphy of widespread tephras from the Late Pliocene to the Middle Pleistocene in the Japanese Islands）



このたびは大変栄誉ある賞をいただき光栄に存じます。受賞の内容は、私が学生時代から継続して行ってきた内容であり、その研究には多くの研究者からのご教授や議論、共同研究を進めてきたことによるものですので、関わっていただいたみなさまに感謝したいと思います。また、私がいる地方博物館に集う地域で調査や標本採集をされている方々からいただく情報や、一緒に調査することで得られた研究成果も多く、それらの方々との関わりについても評価されたことに感謝いたします。

第四紀という時代が、現在まで含まれていることの意義は、第四紀が人類の時代というだけではなく、現在の環境の成立過程を考えるうえで重要だという認識を持っています。私が研究対象としてきた鮮新―更新統は、第四紀からやや遡った時代も含まれていますが、現在の陸地となっている列島における比較的大きな堆積盆のある地域では、鮮新世以降現在までつづく堆積環境を保持していることが多く、それら地域の環境形成を知る上で、地層の時空間的な理解が必要であることから、1950 年以降にそれら地層群の詳細な理解に主眼が置かれていたといえます。

私が研究を始めた 1990 年頃は、これらの研究においては、それぞれの地域である程度の層序と年代についての概要がまとまりつつあった時期でもあり、次は列島全体の詳細な広域層序と国際対比が重要であると考えられていた頃だったと思います。その当時までに、第四紀学会でも広域層序に関する議論やまとめが行われていた時期でもありました。今の視点でみれば、1970 年代には広域テフラの考え方と、後期更新世以降の時代を中心に多くのテフラ対比が行われていた時期でもあるので、その当時に鮮新―更新統に対してその検討が活発でなかったことを不思議に思われる方もいるかもしれませんが、先程も述べましたように 1990 年頃までは、各地域の鮮新―更新統の層序や年代論の構築や各地のテフラ層の詳細な記載が行われているところでした。実際、その当時までにも多くの層序学的研究や年代学的研究が行われていた房総半島の上総層群においても、上部を除くテフラ層の性質を含めた詳細な記載が行われておらず、私にとってはそれが初めてのまとまった研究であったことも、その時代の流れを反映しているかと思います。

日本のテフラに関してはまだまだわからないことが多く、とくに鮮新―更新世については、小規模から大規模な地層が点在しており、それらに含まれるテフラについて、広域対比されているものは、これまで記載されている数に対して 10 分の 1 もなく、噴出火山や噴出地域が特定されているものはまだまだ少ないといえます。これらのテフラはいうまでもなく、数百万年という時間のオーダーにおける島弧火山の活動履歴を残しているものですし、その活動により地上へ放出されたマグマ量の情報を保持しています。これまでの研究結果が今後の研究の進展に役立つことを願っています。

## ◆学術賞　受賞者の言葉　　植村　立（名古屋大学環境学研究科）

件名：アイスコアや鍾乳石の安定同位体比を用いた過去の気候変動の研究（Studies on past climate changes using the stable isotope ratios of ice cores and speleothems）

このたびは、名誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。推薦・選考に携わってくださった先生方、これまで研究を支えてくださった多くの共同研究者の皆様、異分野から第四紀研究へ導いてくださった先生方に深く感謝申し上げます。

私の研究出発点は地球化学にあり、安定同位体分析を基盤として進めてまいりました。大学ではアイスコアを対象に研究を行い、その過程で第四紀学的な視点や古気候の解釈を多くの先生方から学びました。改めて、根幹に立ち返って考えると、同位体分析の長所は観測結果を数値として提示できる点にあります。研究を進める中で、私はこの特長を活かし、同位体データを気温などの指標に換算して提示することを目指すことにしました。「温暖・寒冷」といった相対的な表現ではなく、「何度」という数値で気候変動を示すことで、検証を容易にし、他分野の研究者にも利用しやすい方が有意義だろうと思ったからです。結果として、数値モデルや実験結果を組み合わせて同位体比を気温に換算する手法や、プロキシの開発自体も研究対象となっていきました。

その一例として、海洋上の水蒸気の酸素・水素同位体比（d-excess・$^{17}$O-excess）を測定し、理論的に予測されていた海上の湿度や温度との関係を初めて実証しました。この研究は、海洋蒸発過程の同位体分別を明らかにし、気候モデルや古気候解析における基礎データを与えるものです。論文発表から 15 年以上が経過した現在も引用が続いており、この基礎研究が一定の評価を得ていると感じております。これらの成果をもとに、南極ドームふじアイスコアの安定同位体比を分析し、南極の気温変化と降雪の水蒸気起源となる海水温を復元しました。過去 72 万年間にわたる定量的な南極のローカルな気温変動と大気 $CO_2$ 濃度変動との不一致のメカニズムを理解するための重要なデータを提供できたと考えております。

その後、同位体分析手法を活かし、氷床から鍾乳石へと研究対象を広げています。鍾乳石中の炭酸カルシウムに保存された水（流体包有物）の同位体比を測定する装置を開発し、母液（水）と生成物（炭酸カルシウム）の酸素同位体比を実測することで、気温を算出する手法を確立しました。その結果、「約 70 ～ 80 年周期で約 2℃の変動」というような定量的な気候変化を提示できました。このように、同位体科学の持つ定量性を活かすことで、極域以外の地域でも気候変動をより客観的に復元する道が開かれたと考えております。

第四紀研究は、人類社会が関与しうる地質スケールの時間を扱う点に独自の意義をもっています。私たちが直面している温暖化対策や $CO_2$ 削減の課題は、百年を超える長期的な取り組みを要します。そのような時間軸に基づいた視野を社会に提供できることこそ、第四紀学の使命であり、科学としての存在意義の 1 つであると思います。これまで取り組んできた定量的な気候復元の研究も、そうした長期的視野の中で将来の地球環境を理解する一助となれば幸いです。この受賞を励みに、今後も第四紀学の発展に微力ながら貢献してまいりたいと存じます。

## ◆若手学術賞　受賞者の言葉　　石井祐次（産業技術総合研究所）

対象論文 1：Ishii, Y.（2024）IRSL and post-IR IRSL dating of multi-grains, single grains, and cobble surfaces to constrain fluvial responses to climate changes during the last glacial period in the Tokachi Plain, northern Japan. Quaternary Geochronology, 79, 101486. https://doi.org/10.1016/j.quageo.2023.101486

対象論文 2：Ishii, Y. and Ito, K.（2024）Luminescence dating of sand matrices within gravelly fluvial deposits: Assessing the plausibility of beta dose rate calculation. Quaternary Science Advances, 13, 100160. https://doi.org/10.1016/j.qsa.2023.100160

この度は日本第四紀学会若手学術賞を頂き、大変光栄に存じます。ご推薦くださった方々、ならびに審査員の皆様に厚く御礼申し上げます。また、日頃よりご指導・ご協力をいただいている共同研究者の皆様に心より感謝いたします。

受賞の対象となった研究は、私が 2020 年に産業技術総合研究所に着任して以来取り組んできた、日本の河成段丘堆積物に対する光ルミネッセンス年代測定の技術的課題に関するものです。本研究は、地質変動研究グループが担う原子力規制庁からの委託研究（放射性廃棄物処分に係る地質評価手法等の整備）の一環として実施しました。開始当初は、博士論文をもう一度書くつもりで五年間全力で取り組もうと決意し、その成果がこのような形で評価されたことを大変嬉しく思います。

対象論文 1 では、日本の河成段丘堆積物に光ルミネッセンス年代測定を適用する際、堆積前に信号が十分にリセットされず、年代を過大評価する可能性があるという課題に取り組みました。従来の複数粒子を用いた測定だけでなく、単一粒子測定や礫の測定も組み合わせ、年代値の妥当性を検証した成果です。

対象論文 2 では、河成段丘堆積物が主に砂礫層から成り、通常対象とする砂層が見つからない場合があるという課題に対し、砂礫層中のマトリクス砂を利用することで年代測定が可能であることを検証しました。研究開始時には実現性に疑問もありましたが、当時の地質変動研究グループ長であった塚本　斉さんのご助言とご支援により成果へと結びつきました。今後はこれらの成果を基盤に、段丘形成や氷期―間氷期スケールの環境変動をより精度高く復元していきたいと考えています。

これらの研究は、多くの方々のご支援あってのものです。特に、産業技術総合研究所の田村　亨さんと伊藤一充さんが整備された光ルミネッセンス年代測定室の存在がなければ実現し得なかった成果であり、この場を借りてお二人に深く感謝申し上げます。今後も年代学的手法の発展と第四紀研究の進展に少しでも貢献できるよう努めてまいります。

## ◆論文賞　受賞者の言葉　　林 竜馬（滋賀県立琵琶湖博物館）

論文：論説　滋賀県の遺跡花粉データベースからみる地域・局所スケールの植生変遷史. 第四紀研究，第 63 巻第 1 号，3–17 頁.

このたびは栄誉ある日本第四紀学会論文賞を授与していただき、誠にありがとうございます。推薦および選考していただいた皆様に厚く御礼申し上げます。特に、2021 年大阪大会でのシンポジウム講演の機会を与えていただき、特集号記事として「第四紀研究」への本論文投稿のきっかけを作っていただいた、大阪公立大学の井上　淳氏に深く感謝いたします。

滋賀県の遺跡における花粉分析データに基づく本論文の研究内容は、2012 年に琵琶湖博物館で働き出してまもない時期から、地道にデータの収集と整理を継続してきた成果です。本研究を進めるにあたり、滋賀県文化財保護協会の瀬口眞司氏、京都大学博物館の村上由美子氏、京都府立大学の佐々木尚子氏に、考古学の基本からご指導いただきながら共同研究を実施させていただきました。また、琵琶湖博物館の用田政晴氏、國分政子氏からは、滋賀県の発掘調査報告書について多大なご教授をいただきました。さらに、膨大な手間と時間が必要であった花粉分析データの入力と整理作業に尽力いただいた方々がいなければ、本研究をまとめることはできませんでした。上記の方々にあらためまして深く御礼申し上げます。

本論でまとめさせていただいた花粉分析成果は私のオリジナルデータではなく、滋賀県における長年の遺跡の発掘調査で蓄積されてきたものです。長い年月にわたって、遺跡における花粉分析の重要性を信じて、分析データの蓄積を続けてこられた考古学関係者の方々の信念と努力がなければ、本研究は成立しませんでした。それらの考古学関係者の方々に深い敬意をはらいますとともに、これまでに蓄積されてきた貴重な花粉分析データの整理と活用に関わる研究を今後も微力ながら続けさせていただきたいと考えております。多くの方々との共同研究が進展する中で各地域での遺跡花粉データベースが整備されることで、これまで十分に活用されていなかった“埋もれたデータ”から、新

たな植生史の知見が拓かれることを望んでいます。

また、本論文の議論の中で重要な論理的基盤となっている景観復元法（Landscape Reconstruction Algorithm）（Sugita et al., 2007a,b）は、花粉飛散堆積モデルに基づく定量的な植生復元モデルであり、近年ヨーロッパを中心に応用研究も進展しています。景観復元法は、長く花粉分析の弱点であった空間スケールの復元に対する理論的モデルとして、本研究で遺跡の花粉分析データを解釈する上での基礎となっています。景観復元法の開発者であるタリン大学の杉田真哉氏には、理解の悪い私にも様々な機会において繰り返しご教授をいただきました。この場を借りまして、深く御礼申し上げます。

これからも第四紀学の発展に対して、花粉化石を基礎とした研究をとおして貢献できるように尽力していきますので、引き続きご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## ◆論文賞　受賞者の言葉　　小松原　琢（産業技術総合研究所）、本郷美佐緒（アルプス調査所）、古澤　明（古澤地質）

論文：論説　北上山地北部・外山川上流部（大石川）の最終氷期前期堆積段丘
第四紀研究，第 63 巻第 2 号，127–146 頁.

### 異色経歴の 3 人が挑んだ気候段丘の形成史・形成環境研究

このたび日本第四紀学会論文賞という栄えある賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。多くの方々のご協力や支えをいただいたおかげで、このような賞をいただく研究を為すことができました。私どもに研究という“楽しい業”と“自由な活動の機会”を与えてくださった社会、研究を支えてくださった多くの方々に、心より感謝申し上

小松原　琢

げます。

この研究は、3 名の異色の（異端の？）研究者がタッグを組んで行ったものです。本郷は、中学校の社会見学で湿原堆積物についての展示標本を前に地層や化石を調べると古環境変遷がわかるという解説を聞いて、とても楽しい探究活動のイメージが沸くとともに心が躍り、大学では第四紀地質学に入門し、大学院を修了するまで中部更新統の花粉化石を観察し続けました。現在は郷里の地質コンサルタントに所属し、業務の傍ら花粉層序研究を続けています。古澤は工学部で地質学を学んだ後、郷里のコンサルタントに勤務、独力で屈折率測定装置を開発したうえテフラ分析を主とする専門性の高い地質調査会社を起業、会社経営と同時に研究を続けています。小松原は地質学科卒業後地理学科で地形学を学びなおし、コンサルタント勤務を経て復学、その後地質調査所（現産総研地質調査総合センター）で地質図作成や活断層調査の傍ら基礎的な地形研究を続けてきました。3 人の共通点と言えば、こだわりが強く、ガムシャラに仕事してきたこと、器用に世渡りする資質が決定的に欠けていること、かもしれません。

北上山地という、前世紀後半の気候地形研究において中心地の 1 つとされ、盛んに研究されてきた地域に、四半世紀の研究空白期をおいて踏み込むことは、なかなか勇気のいることでした。しかし、5 万分の 1 地質図作成において小松原を先導してくれていた産総研・地質情報研究部門の内野氏から「面白い露頭がありますよ！」という連絡をいただいて入った沢で、思いもよらない貴重なデータを得ることができました。そこを出発点として、広く東北地方のテフラ、花粉層序、古気候、日本の気候段丘形成過程へと、3 人で研究の幅を広げていった結果、さらに思いもよらない結果を得ることができました。研究とは、先人の肩にちゃっかり乗ることに加え、努力と運を乗じたもの・・・と改めて感じています。

この研究の後、3 人はそれぞれ自分の持ち場の仕事と独自の研究の世界に戻っています。私どものような、研究を下支えする立場にある者が、長く楽しく研究が続けられること、それが正当に評価していただけるような社会が存続することを、祈ってやみません。どうか、今後ともよろしくお願い申し上げます。

## ◆奨励賞　受賞者の言葉　　廣瀬允人（名古屋大学博物館）

論文：論説　岐阜県九合洞窟遺跡より出土した縄文時代草創期終末の動物遺存体（英文）
第四紀研究，第 63 巻第 3 号，183–200 頁.

この度は、著名な研究の数々で知られる「第四紀研究」に掲載いただいた論文において奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。編集委員会の皆様、並びに査読を行ってくださった先生方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

この論文は、岐阜県の九合洞窟遺跡から 1950 年の調査で出土した遺物について研究した成果になります。過去に名古屋大学が発掘調査した遺跡の遺物が名古屋大学博物館に移管された際に、遺物の再整理を行った過程で行われた研究の一つです。保管されていた九合洞窟出土遺物の多くが動物骨で、未攪乱層の可能性が高い調査終了直前に掘削された堆積の試料を年代測定したところ、日本では希少な縄文時代草創期終末頃の動物遺存体群であることがわかりました。九合洞窟から出土した動物骨は、調査当時あまり注目されなかった

ためか、発掘直後に新聞紙に包まれた状態で木箱に収納され、そのまま保管されていました。縄文時代草創期に属する動物遺存体の定量的な報告は少なく、これらを紐解くことで、貴重なデータを提示することができたと思います。

一方、この資料を整理、分析するにあたり、資料の重要性に見合うだけの成果を提示しなければならないという重責を意識する必要がありました。長年待たれていたデータであるだけに、できるだけ多くの意義ある情報を抽出し、周辺遺跡の情報と合わせて慎重に議論することが求められていると思いました。データの記載のみでなく、どのようなことが読み取れるかを細大漏らさず拾い出すことに努めました。そこで、洞窟遺跡という性質にも注目し、近隣の洞窟・岩陰遺跡の利用開始期がなぜ九合洞窟より後の縄文時代早期であるのかについて季節性と日当たりの関係から解釈を試みました。九合洞窟ではイノシシの下顎骨の萌出段階から冬季の狩猟が推測されたため、寒冷期の利用のために南側に開口し、洞内にも日が当たる九合洞窟が選ばれたものと考えました。縄文時代草創期の洞窟・岩陰遺跡の多くが南側に開口していることも同様の理由かもしれません。加えて、考古学的考察のみでなく、ニホンジカのサイズが後の時代の遺跡から出土した周辺の資料群のデータと比較して大きいという点も定量的に示し、古生物学的な特徴についても注目した議論を行いました。

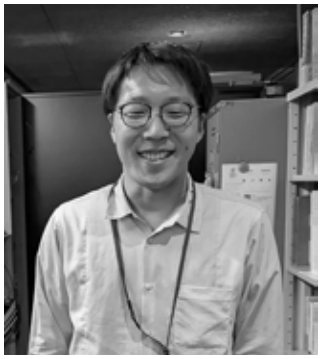
この研究においてもう一つ慎重に考えなければならなかったのは、論文化した際どこのジャーナルに投稿するかでした。「第四紀研究」は紙、電子両方の媒体で出版される等々、この論文の投稿先として私が求めていた全ての条件に合致するほぼ唯一の日本の学術誌でした。このような素晴らしいジャーナルに出会えて本当に良かったと思っております。助成金が得られず、なけなしの財布から費用を捻出しましたが、この賞を賜り報われた気持ちです。今後も第四紀学の発展に貢献できるよう励んでいきたいと思います。引き続きご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

## ◆奨励賞　受賞者の言葉　　須賀永帰（奈良文化財研究所・学術振興会特別研究員）

論文：総説　打製石器の石材における剥離予測性：岩石の表面あるいは内部の構造の把握と力学的特性の測定による検証方法のレビュー
第四紀研究，第 63 巻第 4 号，215–228 頁.

この度は日本第四紀学会奨励賞をいただくことになり、大変光栄です。推薦者の皆様、審査員の皆様に深く感謝申し上げます。また、査読者の皆様や編集委員の皆様、東北大学の田村光平准教授、岩宿博物館の鈴木秋平学芸員の建設的なコメントによって、論文を完成させることが出来ました。この場を借りてお礼申し上げます。

本論文はそれまでの先史考古学で石器石材の「質」と呼称されていた概念に着目し、「質」が内包する要素の中でも「石材の剥離しやすさ」に限定し「剥離予測性」という枠組みを提案したものになります。そして石器石材の「剥離予測性」を定量的に分析する手法を力学的あるいは構造的の 2 つのアプローチからレビューしたものになります。このテーマは、博士課程で西アジアのチャート石材を対象に研究を進めていた時に、チャートのタイプ間で違いを示す手法を調べていく中で辿り着いたものです。チャートタイプ間という、同一種の岩石間で比較する上で、定量的な手法を用いないと差として成立させられない、という課題



を解決する必要がありました。先行研究を深く調べ、自分でも硬さ測定を実践していく中で、測定手法が研究によってバラバラであることに気づきました。また、岩石のどういった要素が石器の剥離しやすさにつながるのか、石器が剥離する過程のどの部分にどのような影響を及ぼしているのか、という議論が曖昧なまま論旨が展開されていることが多いという点にも気づきました。日本の先史考古学ではこのテーマはこれまであまり研究されてきませんでした。今後の先史時代研究には必要

になるものですが、学際的研究というハードル以前に、議論が整理しきれていない現状では取り組むのをためらう研究者もいるのでは、という考えから執筆を試みました。いずれは高い評価を頂ける日が来るかもしれないが、今すぐ認められるものではないという認識で執筆していたので、奨励賞を受賞できるとは思いませんでした。この論文が他の研究者の方々にどれだけ役に立つのかはわかりませんが、少なくともこういう研究手法も存在するという点は共有できたのかなと思います。

私は本論文の掲載後、日本の関東平野の石器石材を対象に、力学的性質の測定を行っています。日本、特に関東平野は石器石材の利用に関する研究が進んでおり、各遺跡での利用状況と石材産地が高い精度でわかっています。ここに力学的性質に基づいた「剥離予測性」の議論が加われば、より高い解像度で当時の人類集団の実像に迫ることが出来るのはというモチベーションで研究を進めています。論文で記した様々な手法を試しており、「どういった性質がどういった理屈で石器の剥離しやすさにつながるのか」を解明できればと思っています。これからも第四紀学の発展に微力ながら貢献できればと思います。引き続きご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

また最後になりますが、この研究テーマを取り組むきっかけをくださり、ご指導いただいた恩師である名古屋大学博物館の門脇誠二教授に、深く感謝申し上げます。

## ◆日本第四紀学会 2025 年度第 2 回評議員会議事録

日　時：2025 年 8 月 28 日（木）15:00 ～ 18:00
場　所：島根大学　教養講義棟 102 室
方　法：対面＋ Zoom オンライン（バイブリッド）
出席者：北村晃寿（会長）、藤原　治（副会長）、横山祐典（副会長）、＜以下、評議員＞須貝俊彦（議長）、青木かおり、吾妻　崇、池原　実、奥野　充、白井正明、目代邦康、中塚　武、納谷友規、堀　和明、山田和芳、石原与四郎、オブラクタ　スティーブン、苅谷愛彦、久保純子、小松原純子、齋藤めぐみ、田村　亨、長橋良隆、三田村宗樹、森先一貴
委任状：議長委任 12 通
オブザーバー出席：鈴木毅彦（前会長、学会設立 70 周年記念事業委員会委員長）、齋藤咲良（事務局）

### Ⅰ　報告事項

(1) 2024 年度事業報告

担当の各委員長、領域代表またはその代理として、山田前庶務委員長から報告が行われた（総会議事録の資料 1 参照）。

(2) 2024 年度会計決算報告・会計監査報告

堀前会計委員長から、2024 年度会計決算報告の説明が行われた（総会議事録の資料 2 参照）。また、2023-2024 年度会計監査の藤原会員から 2024 年度会計監査報告が行われた（総会議事録の資料 3 参照）。

(3) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

横山副会長より報告があった（総会議事録の資料 5 参照）。

(4) 2025 年大会における日本第四紀学会若手・学生発表賞について

池原行事委員長から、2025 年大会時の若手・学生発表賞の選考スケジュールと選考委員について報告された。受賞者の決定は、大会終了後に速やかに行う。

(5) 70 周年記念事業委員会からの報告

鈴木委員長から、進捗状況について報告があった（総会議事録の資料 4 参照）。

(6) 過去の講演要旨集の取り扱いについて

北村会長より、13 号以降 49 号まで（うち 30 号は欠号）は 1 冊を学会で保管し、デジタル化したものを学会ウェブサイトで公開することについて説明があった。

(7) 学会資料のデジタル化について

山田前庶務委員長から、庶務委員会が保管している学会資料をデジタル化することについて説明があった。

(8) SNS での情報発信について

目代広報委員長から、SNS を用いた情報発信について、体制、手法、内容等を検討し実施することが報告された。

(9) 授賞式の画像の提供依頼について

山田前庶務委員長から、琵琶湖博物館からプレスリリースに際し資料として授賞式の写真を掲載

したい旨申請があり、これを執行部会において承認したことについて説明があった。

(10) その他

特になし。

## II　審議事項

(1) 2025 年度事業計画

各担当委員長、領域代表または山田前庶務委員長より説明があり、総会に諮ることで承認された(総会議事録の資料 6)。

(2) 2025 年度予算案

納谷会計委員長から予算案が示され、総会に諮ることで承認された（総会議事録の資料 7)。繰越金を有効に活用することと、会員減少による会費収入の減少についての対策を検討することが再確認された。

(3) 日本第四紀学会名誉会員候補者選考委員会委員長・委員について

北村会長より説明があり、第 1 回評議員会で承認された久保純子、鈴木毅彦、江口誠一、前杢英明会員に加えて、田村　亨会員を委員とすることと、前杢英明会員を委員長とすることが承認された。

(4) 年会費請求の方法について

納谷会計委員長から､請求書発送を 1 回（8 月頃、1 回目の請求時期付近）とし、メール配信は従来通り 6 月、11 月、3 月に行うことが提案され、承認された。

(5) 渉外委員会委員の追加について

北村会長より、第 1 回評議員会で承認された 5 名に加え、前杢英明会員（ジオパーク学術支援委員会)、小荒井　衛会員（防災学術連携体、ただし 2026 年 6 月まで)、山田和芳会員（JpGU 教育検討委員）を追加することが提案され、承認された。

(6) その他

目代広報委員長より、渉外委員会の現在の活動状況に合わせ、渉外委員会内規の 10 条を削除し、それ以降の条項を繰り上げることが提案され、これを承認した。

## III　確認事項

総会資料、2025-2026 年度役員・委員会委員の確認を行った。

日本第四紀学会 渉外委員会内規の改正部分（抜粋）

| （旧） | （新） |
|---|---|
| [日本ジオパーク委員会]<br>10. 自然史学会連合が開催する総会，イベント等に参加・協力し，その内容を執行部会に報告する.<br>[地学オリンピック日本委員会]<br>11. 地学オリンピック日本委員会が開催する会合に出席し，その内容を執行部会に報告する.<br>[その他，第四紀学と関連する学術団体]<br>12. 上記以外の学術団体等から学会に対して委員選出の要請があった場合には，その内容に適した委員を選考し，本人の承諾および執行部会の承認を依頼する.<br>[その他]<br>13. 本内規の変更には，評議員会の承認を必要とする.<br>14. 本内規は 2017 年 8 月 1 日から施行する. | [地学オリンピック日本委員会]<br>10. 地学オリンピック日本委員会が開催する会合に出席し，その内容を執行部会に報告する.<br>[その他，第四紀学と関連する学術団体]<br>11. 上記以外の学術団体等から学会に対して委員選出の要請があった場合には，その内容に適した委員を選考し，本人の承諾および執行部会の承認を依頼する.<br>[その他]<br>12. 本内規の変更には，評議員会の承認を必要とする.<br>13. 本内規は 2025 年 8 月 29 日から施行する. |

## ◆日本第四紀学会 2025 年度総会議事録

日　時：2025 年 8 月 30 日（土）15:45 ～ 17:45
会　場：島根大学松江キャンパス・大学ホール
方　法：会場での対面と Zoom システムを用いたオンラインによるバイブリッド会議

司会の池原　実行事委員長による開会の辞、北村晃寿会長、齋藤文紀大会実行委員長の挨拶に続き、定足数の確認（委任状を含め正会員数の 10 分の 1 以上の出席が必要）が行われ、総会成立条件を満たしていることが報告された（最終的な参加者数は、会場参加正会員 82 名、オンライン参加者 6 名、委任状 79 通：すべて議長委任）。議長に高原　光会員を選出し、下記の議事が進められた。総会に引き続いて、授賞式が行われた。

**報告事項**

(1) 2024 年度事業報告
資料 1 に基づき、山田前庶務委員長から報告された。

(2) 2024 年度会計決算報告・会計監査報告
資料 2 に基づき、堀前会計委員長から会計決算報告が行われた。また、2023-2024 年度会計監査の藤原　治・植木岳雪会員から資料 3 に基づき会計監査報告が行われた（報告は藤原会員）。

(3) 2025 年日本第四紀学会学会賞・学術賞・若手学術賞選考報告
詳細は第四紀通信第 32 巻第 3 号に掲載済み。

(4) 2025 年日本第四紀学会論文賞・奨励賞選考報告
詳細は第四紀通信第 32 巻第 3 号に掲載済み。

(5) 学会設立 70 周年記念事業委員会（特別委員会）からの報告
資料 4 に基づき、学会設立 70 周年記念事業の進捗について報告された。

(6) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告
資料 5（各 URL 参照）に基づき、齋藤文紀会員より活動報告がなされた（The Sir Nicholas Shackleton Medal https://inqua.org/our-organisation/medals）。また、INQUA 2027 年インド大会（1/28 ～ 2/3）のセッション募集締切（https://www.inquaindia2027.in/）、アジア第四紀学会（ASQUA）を 2028 年もしくは 2029 年に日本で開催することを検討するよう依頼されたこと、INQUA によるプロジェクト支援（https://backend.inqua.org/app/uploads/2025/06/IRNISA-Grant_Guidelines_2025.pdf）についての紹介があった。

(7) 2025 年度第 1・2 回評議員会、第 1・2 回執行部会、第 1 回通信執行部会審議事項報告
新会計年度に実施された評議員会及び執行部会での審議事項が山田前庶務委員長から報告された。

(8) その他
特になし。

**審議事項**

(1) 2024 年度事業報告
資料 1 の 2024 年度事業報告は承認された。

(2) 2024 年度会計決算報告・会計監査報告
資料 2、3 の 2024 年度会計決算報告・会計監査報告は承認された。

(3) 2025 年度事業計画案
資料 6 の 2025 年度事業計画案は承認された。

(4) 2025 年度予算案
資料 7 の 2025 年度予算案は承認された。

(5) 会則の一部改正について
評議員会（2025 年度第 1 回）の承認を経て、以下 1 件に関する会則の一部改正が提案されて、承認された。

(4) その他
特になし。

日本第四紀学会会則の改正部分（抜粋）

| （旧） | （新） |
|---|---|
| 第 14 条 評議員会は会長，副会長と評議員によって構成され，会則第 2 条に定める本会の基本方針に基づき，本会の運営に関する案件を審議決定する.また，本会会則の施行に係わる細則(規程，内規など)を決定する.<br>（中略）<br>4.会長経験者および名誉会員は，評議員会に出席し，意見を述べることができる. | 第 14 条 評議員会は会長，副会長と評議員によって構成され，会則第 2 条に定める本会の基本方針に基づき，本会の運営に関する案件を審議決定する.また，本会会則の施行に係わる細則(規程，内規など)を決定する.<br>（中略）<br>4.会長経験者は，評議員会に出席し，意見を述べることができる. |

**●資料 1　2024 年度事業報告**

**1-1 庶務委員会**

(1) 2024 年度の役員・委員会委員等を決定し、委嘱を行った。
(2) 総会を 2024 年 8 月 31 日に大会会場の東北大学青葉山北キャンパスでの対面と Zoom システムを用いたオンラインによるハイブリッド会議として行った。
(3) 評議員会（第 1 回[1)]：2024 年 7 月 7 日、第 2 回[2)]：2024 年 8 月 29 日、第 3 回[1)]：2024 年 10 月 16 日、第 4 回：2025 年 2 月 22 日、第 5 回：2025 年 6 月 15 日）を開催した。
(4) 執行部会（第 1 回[1)]：2023 年 7 月 27 日、第 2 回[1)]：2024 年 9 月 29 日、第 3 回[1)]：2024 年 12 月 8 日、第 4 回[1)]：2025 年 2 月 1 日、第 5 回[1)]：2025 年 5 月 31 日、通信第 1 回：2024 年 8 月 19 日～ 8 月 25 日）を開催した。
([1)]オンライン、[2)]ハイブリッド（対面＋オンライン））
(5) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。
　2025 年 8 月 20 日時点での会員数は以下の通りである。
　正会員数：849 名（学生会費適用者数 :28 名）、
　賛助会員数：9 社 、名誉会員：17 名
　逝去：遠藤邦彦名誉会員（元会長：2009 ～ 2012 年度、元副会長：2007 ～ 2008 年度）、杉村　新名誉会員（元幹事：1965 ～ 1968 年度）、高橋　学会員
(6) 2025 年学会賞・学術賞・若手学術賞・論文賞・奨励賞の受賞候補者の推薦募集（締切：2025 年 2 月 28 日）を第四紀通信・学会ウェブサイト及び会員 ML を通じて行った。また、学会賞選考委員会および論文賞選考委員会を立ち上げ、選考作業の依頼を行った。
(7) 転載許可申請に関する業務を行った(5件承認)。
(8) シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行った（協賛：地学オリンピック、後援：Soil Health シンポジウム）。
(9) 学術機関等への支援を行った（国立大学教育研究評価委員会専門委員及び機関別認証評価委員会専門委員の候補者の推薦）。

**1-2 会計委員会**

(1) 会計に関する承認業務を行った。
(2) 2024 年総会において、2023 年度の収支決算を報告し、2024 年度の予算案を提案した。
(3) 2023 年度決算に対し会計監査を受けた。
(4) 2024 年度の予算案を作成した。
(5) 会員数維持のため、会費の見直しを行った。会則の改正により、学生会費適用者の会費は 2,000 円となった。また、65 歳以上の正会員は、50,000 円を一括納入した場合、終身会員とすることとした。

**1-3 編集委員会**

(1)「第四紀研究」通常号の編集を進めた。
(2) 2023 年特集号「縄文時代早期人とその生態―群馬県居家以岩陰遺跡を中心に―（特集号委員長工藤雄一郎会員）」の編集を進めた。
(3) 2024 年度仙台大会「東北の自然災害と第四紀学：最近の研究成果とこれから（特集号委員長　堀　和明会員）」の編集を進めた。
(4) 編集委員会（通常号）をオンライン及びメール審議形式で 14 回開催した。2025 年 8 月 20 日現在の通常号手持ち原稿（書評を除く）は受理前 10 編、受理済 0 編。

**1-4 広報委員会**

(1)「第四紀通信」の編集および日本第四紀学会ウェブサイト、メーリングリストの維持管理を行った。
(2)「第四紀通信」第 31 巻第 3、第 4 号、第 32 巻第 1、第 2 号を編集し、発行した。
(3)「第四紀通信」各号の電子版（PDF 版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ウェブサイトで公開した。
(4) 日本第四紀学会ウェブサイトを通じて広報、情報提供等を行った。
(5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて広報、情報提供等を行った。2024 年度の配信件数は 130 件（#1746 ～ 1875）であった。
(6) 日本第四紀学会ウェブサイトのリニューアルを行った。

**1-5 行事委員会**

(1) 日本第四紀学会 2024 年大会を 2024 年 8 月 29 日（木）～ 9 月 2 日（月）に東北大学青葉山北キャンパス（宮城県仙台市）において、東北大学大学院理学研究科との共催にて開催した（大会実行委員長：堀　和明会員、実行委員：浅海竜司会員、石澤尭史会員、井龍康文会員、高橋尚志会員、山田　努会員、伊藤晶文会員、目代邦康会員、西城　潔会員、遠田晋次氏）。大会直前から期間中にかけて台風 10 号に翻弄されたものの、一般研究発表を急遽、対面とオンラインのハイブリッドに切り替えるなどして、無事にすべてのプログラムを実施することができた。会場には約 110 名が来場し、オンラインも含め 136 名の参加者（参加登録のみも含む）となった。8 月 29 日は午前にアウトリーチ巡検、午後に評議員会が開かれた。8 月 30･31 日に一般研究発表(口頭発表 31 件、ポスター

発表 22 件）が行われ、活発な議論が展開された。また、多目的室では複数の企業による企業展示が行われた。31 日の午後には、総会・授賞式を実施した。9 月 1 日午前の公開シンポジウム「東北の自然災害と第四紀学：最近の研究成果とこれから」では、第四紀学やその近接分野の専門家 5 名に登壇いただき、東北地方で近年発生した各種の自然災害に関連する研究成果を紹介いただいた。災害が多発する日本において、第四紀学やその研究者が果たす役割が大きいことを改めて感じることができた。9 月 2 日には 7 名が参加し、栗駒山やその周辺で専門巡検が実施された。

(2) 2024 年大会若手・学生発表賞の選考について、審査委員会を立ち上げて実施した。南舘健太会員（口頭若手）、吉池奏乃会員（口頭学生）、林　尚輝会員（ポスター若手）、山根悠輝会員（ポスター学生）がそれぞれ受賞した。

(3) 2024 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会の関係者調整およびポスター製作および告知を行った。

(4) 2024 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念講演会を 2025 年 2 月 22 日（土）9:00 ～ 12:05 にオンラインで開催した。参加者は約 75 名であった。講演は、学会賞受賞者の高原　光会員（京都府立大学）による「さらに詳細な古植生復元をめざして」、学術賞受賞者の加　三千宣会員（愛媛大学）による「別府湾堆積物研究から人新世の科学的根拠に至るまで」、学術賞受賞者の田村　亨会員（産業技術総合研究所）による「砂質海岸堆積物の年代測定から何が分かるのか？」であった。

(5) 2025 年大会を 2025 年 8 月 28 日（木）～ 9 月 1 日（月）に島根大学松江キャンパスを会場として開催する予定で準備を進めている（大会実行委員長：齋藤文紀（島根大）実行委員：瀬戸浩二、香月興太、入月俊明、酒井哲弥、渡邉正巳（島根大）、中村唯史、井上雅仁（三瓶自然館）、石賀　敏（鳥取地学会）、池原　実（高知大･行事委員長）ほか）。専門巡検は 8 月 28 日と 9 月 1 日、一般研究発表は 8 月 29 日・30 日、総会・授賞式は 8 月 30 日、公開シンポジウム「後期完新世の気候変動と人間活動との関係をさぐる」および普及講演会「縄文時代から現在に至る出雲平野・宍道湖の移り変わり」は 8 月 31 日に実施予定である。

(6) 70 周年記念大会となる 2026 年大会は茨城県つくば市で開催することで調整されている。

**1-6 渉外委員会**

(1) 日本地球惑星科学連合（JpGU）関係 :JpGU 第 31 回学協会長会議が 2024 年 11 月 27 日（水）にオンラインにて開催され、山田庶務委員長が出席した。第 32 回学協会長会議が 2025 年 5 月 28 日（水）にハイブリッドで開催され、鈴木会長が出席した。2025 年大会（5 月 25 日～ 30 日）において、日本第四紀学会が学協会セッションとして単独開催する『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』（5 月 29 日 AM1 ～ AM2）は講演総数 34 件、共同開催した『活断層と古地震』（5 月 26 日 AM1 ～ PM2）は講演総数 40 件であった。その他 3 セッションを含めて 5 セッションを学協会セッションとして指定した。また学協会インフォメーションコーナーにてリーフレット「第四紀とは」を配布した。

(2) 防災学術連携体関係：防災学術連携体 2024 年度総会（7 月 30 日）に、担当委員の小荒井会員が出席した。同日 7 月 30 日の令和 6 年能登半島地震・7 ヶ月報告会で、片岡香子会員が新潟市の広域液状化被害に関する報告を行った。8 月 30 日の第 6 回防災に関する学術会議、学協会、府省庁の連絡会に鈴木会長・小荒井会員が出席した。同日の「令和 6 年能登半島地震災害における課題と教訓」に関して、宍倉正展会員が能登半島の地形変化に関する報告を行った。2025 年 4 月 30 日（水）に開催されたシンポジウム「防災庁への期待」にて、吾妻　崇会員が講演を行った。

(3) 自然史学会連合関係：2025 年 6 月 15 日（日）にオンラインで開催された自然史学会連合の総会に、担当の林　竜馬会員が出席した。

(4) 地学オリンピック関係：地学オリンピック予選応募者に配付する「地球にわくわく未来ガイド」に、学会案内（1 ページ）を掲載した。

(5) 日本ジオパーク学術支援連合：ジオパーク地震学習会「ジオパーク活動で使える地震学 8：日本列島の大地形の成因について（開催日：11 月 22 日、オンライン）」にコメンテーターとして、山田和芳会員が参加した。担当委員が 2025 年 6 月より植木岳雪会員から前杢英明会員に交代した。

**1-7 領域 1「気候変動及び海洋の諸プロセス」**

(1) JpGU2025 のユニオンセッション「人新世・第四紀の気候および水循環（U-03）」を共催した。

(2) 第 2 回岩相記載武者修行イベントを 2024 年 11 月 16 日から 19 日に高知大学海洋コア国際研究所で開催した（日本第四紀学会・高知大学海洋コア国際研究所主催、日本地球掘削科学コンソーシアム（J-DESC）・日本堆積学会共催、講師：池原研会員（産業技術総合研究所）、アシスタント：加三千宣会員（愛媛大学）・鈴木克明会員（産業技術総合研究所）・池原　実会員（高知大学）。募集人数 8 名に対して、9 名の応募があり、7 名を選抜し、領域活動費から実施にかかる費用及び参加者の旅

費の一部を支援した。うち、2 名が日本第四紀学会に入会した。

**1-8 領域 2「陸上の諸プロセス」**

(1) 2021 年 7 月 24 日・25 日に開催した共催遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」の内容を「第四紀研究」の特集号とする編集作業を進めた。(編集委員会報告事項参照)

(2)「令和 6 年能登半島地震」に関する学会主催シンポジウムを領域 5 とともに 2024 年 7 月 7 日に開催した。

**1-9 領域 3「層序と年代基準」**

(1) 広報委員会と協力し、第四紀学において国際的に重要な日本の露頭の紹介を「日本の第四系」と題して学会 Web ページに新設した。その第一弾として「玄武洞」(兵頭政幸会員作成) を掲載した。

**1-10 領域 4「人類と生物圏」**

特になし。

**1-11 領域 5「現代社会に関わる第四紀学」**

(1)「第四紀とは」の改訂版パンフレットの作成作業を進めた。

(2)「令和 6 年能登半島地震」に関する学会主催シンポジウムを領域 2 とともに 2024 年 7 月 7 日に開催した。

**1-12 オンライン特別委員会**

(1) 2023-2024 年度の学会行事等について、Web 上のカレンダーを作成してアップした。

**1-13 学会設立 70 周年記念事業特別委員会**

資料 4 参照。

**●資料 2　p.24,25 参照**

**●資料 3　p.26 参照**

**●資料 4　学会設立 70 周年記念事業委員会報告**

(1) 70 周年大会の開催場所は産業技術総合研究所、開催期間は 2026 年 8 月 20 日から 22 日までで、250 名の参加を見込んでいる。

(2) 口頭発表はすべてシンポジウムで行い、一般研究発表はポスターで行うこととする。シンポジウムは各領域で開催し、所要時間は 3 時間に統一する予定である。

(3) シンポジウムの企画と合わせて各領域から委員を選出するなど、LOC および実行委員会のメンバーを増やすことを検討中。

(4) 開催期間中に、地質標本館で第四紀学に関連した特別展を行う予定である。

(5) 海外からの招待講演、そのための費用などについて検討する。ASQUA2028（あるいは 2029）を意識してアジア等近隣の研究者を招待することも検討する。

(6) 記念出版物に関しては、学会設立 70 周年大会時には出版済みとなるよう進めている。朝倉書店に出展を依頼し宣伝したい。

(7) 産業技術総合研究所地質調査総合センターから開催の後援を得た。

**●資料 6　2025 年度事業計画案**

**1-1 庶務委員会**

(1) 総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。

(2) 入会・退会者の確認を行うとともに会員名簿の管理を行う。

(3) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考および論文賞･奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。

(4) 名誉会員候補者選考委員会を立ち上げ、関連する業務を行う。

(5) 転載許可申請への対応を行う。

(6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。

(7) 顕彰規程や転載許可申請書等の改正・見直しに関する業務を行う。各受賞者への記念品、副賞、会員への研究助成などに関するアンケートを実施する。

(8) 歴代大会実行委員、巡検案内者、講習会講師、INQUA 役員・委員などのリストを整理し、顕彰関係の基本資料に加える。

(9) 学会資料の電子化、保存方法について検討する。

(10) 将来における庶務委員会の分割化や書記雇用について検討する。

(11) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

**1-2 会計委員会**

(1) 会計に関する承認業務を行う。

(2) 2025 年総会において、2024 年度の収支決算を報告し、2025 年度の予算案を提案する。

(3) 会計監査を受ける。

(4) 現状の問題点と長期的な財政事情を考慮し、会計の観点から学会運営を検討する。

(5) 物価高の社会情勢を考慮し、アルバイト（書記）

の時間給単価値上げを検討する。

**1-3 編集委員会**
(1)「第四紀研究」第 64 巻第 4 号、第 65 巻第 1 号、第 2 号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGE を通じて電子ジャーナルとしての刊行を行う。必要に応じて、電子付録を J-STAGE Data で公開する。
(2)「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

**1-4 広報委員会**
(1)「第四紀通信」第 32 巻第 3 号、第 4 号、第 33 巻第 1 号、第 2 号を編集し、発行する。
(2)「第四紀通信」各号の電子版（PDF 版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ウェブサイトに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。
(3) 日本第四紀学会ウェブサイトを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
(4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
(5) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行う。
(6) SNS を用いた情報発信について、体制、手法、内容等を検討し実施する。

**1-5 行事委員会**
(1) 日本第四紀学会 2025 年大会を 2025 年 8 月 28 日（木）～ 9 月 1 日（月）に、島根大学松江キャンパス（島根県松江市）で開催する。
(2) 2025 年大会における若手・学生発表賞の審査委員会の立ち上げ、審査に関する業務を行う。
(3) 2026 年大会（会場はつくば市の産業技術総合研究所、日程は 2026 年 8 月 20 日（木）～ 8 月 22 日（土）を軸とした日程とする予定）の準備を関係者と調整して行う。
(4) 学会賞・学術賞受賞記念講演会を開催する。

**1-6 渉外委員会**
(1) 日本地球惑星科学連合において日本第四紀学会の貢献を高めるために、2026 年大会においても、『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を日本第四紀学会としてセッション提案及び開催し、日本第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的に進める。なお 2026 年大会は AGU との共催となるため、原則英語での発表が求められている。
(2) 防災学術連携体が主催するシンポジウムや企画に対して、日本第四紀学会としてのプレゼンスを高めるために積極的に参画する。
(3) 自然史学会連合、地学オリンピック、ジオパーク学術支援連合等、国内関連学協会との連携を高めていく。

**1-7 領域 1「気候変動及び海洋の諸プロセス」**
(1) JpGU2026 において、関連セッションを開催する。

**1-8 領域 2「陸上の諸プロセス」**
(1) 陸上の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
(2) JpGU2026 に向けて、陸上の諸プロセスに関連したセッションの提案を検討する。
(3) INQUA TERPRO コミッションの研究プロジェクトに領域メンバーの参加を促す。

**1-9 領域 3「層序と年代基準」**
(1) 層序と年代基準に関するシンポジウムを企画・開催する。
(2) 日本国内の第四系標準層序地域についての情報を学会ウェブサイトに掲載する。

**1-10 領域 4「人類と生物圏」**
(1) 領域に関係するシンポジウムを企画・開催する。科研費や研究プロジェクト等によって今後 1 年の間に開催される、領域 4 に関係が深いテーマでの公開シンポジウムやワークショップを、領域 4 が共催することで、当該テーマについての第四紀学会員や関係者への情報周知と学術交流を図る（例えば、同位体年輪考古学のワークショップなど）。

**1-11 領域 5「現代社会に関わる第四紀学」**
(1) 領域に関係するシンポジウムを企画・開催する。
(2)「第四紀とは」の改訂版パンフレットの作成作業を広報委員会とともに進める。

**1-12 オンライン特別委員会**
(1) オンラインシステムの効率化についての検討を進める。

**1-13 学会設立 70 周年記念事業特別委員会**
(1) 記念出版本に関する調整を進める。
(2) 2026 年大会および関連行事（イベント）の開催準備を行う。

……

**●資料 7　p.27 参照**

## ●資料 2

日本第四紀学会

### 2024年度収支会計報告

（2024年7月1日～2025年6月30日現在）

収 入 の 部　　（単位：円）

| 科　　目 | 予　算　額　① | 6月30日現在② | 増 減 ② － ① | 執 行 率 ② / ① | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 会費収入 | 7,796,000 | 8,747,550 | 951,550 | 112.2% | 正会員811名、学生会員34名、賛助9社（2025年6月30日時点） |
| 正会員会費収入 | 7,596,000 | 8,547,550 | 951,550 | 112.5% | 通常会員会費 8,418,000円 |
| | | | | | 学生会員会費 72,000円 |
| | | | | | 海外会員会費 57,550円 |
| 賛助会員会費収入 | 200,000 | 200,000 | 0 | 100.0% | 20,000円×9社(10口) |
| 誌代 | 600,000 | 309,760 | -290,240 | 51.6% | 定期雑誌購入 |
| 別刷代・超過頁代収入 | 250,000 | 297,231 | 47,231 | 118.9% | 63巻3号・64巻1～2号　別刷・超過頁・カラー代等 |
| 雑収入 | 150,000 | 312,229 | 162,229 | 208.2% | 学術著作権使用料分配金,2024年大会余剰金 |
| 利子収入 | 500 | 9,297 | 8,797 | 1859.4% | 預金利息 |
| 広告料収入 | 0 | 0 | 0 | | 2024年大会予稿集広告無しの為 |
| 役員選挙積立金取崩収入 | 200,000 | 200,000 | 0 | | |
| INQUA対策積立金取崩収入 | 0 | 0 | 0 | | |
| 名簿作成積立金取崩収入 | 0 | 0 | 0 | | |
| 予備費積立金取崩収入 | 0 | 0 | 0 | | |
| 収　入　合　計 | 8,996,500 | 9,876,067 | 879,567 | 109.8% | |
| 前 期 繰 越 金 | 22,395,078 | 22,395,078 | 0 | 100.0% | |
| 合　　計 | 31,391,578 | 32,271,145 | 879,567 | 102.8% | |

支 出 の 部　　（単位：円）

| 科　　目 | 予　算　額　① | 6月30日現在② | 増 減 ② － ① | 執 行 率 ② / ① | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 会誌発行費 | 3,301,200 | 2,448,540 | -852,660 | 74.2% | 第四紀研究 63巻3～4号,64巻1～2号 |
| 印刷費 | 1,700,000 | 1,030,590 | -669,410 | 60.6% | 63巻3～4号,64巻1～2号（J-STAGE掲載費用含） |
| 編集費 | 300,000 | 208,940 | -91,060 | 69.6% | 会誌編集費 |
| 編集人件費 | 1,201,200 | 1,201,200 | 0 | 100.0% | 編集書記手当 |
| 別刷印刷費 | 100,000 | 7,810 | -92,190 | 7.8% | 64巻2号 |
| 会誌・会報発送費 | 550,000 | 452,233 | -97,767 | 82.2% | 会誌・通信発送関連費用 |
| 会報発行費 | 800,000 | 791,234 | -8,766 | 98.9% | 第四紀通信 31巻3～4号,32巻1～2号 |
| 印刷費 | 500,000 | 502,854 | 2,854 | 100.6% | |
| 編集費 | 90,000 | 90,780 | 780 | 100.9% | 第四紀通信編集費 |
| 編集人件費 | 210,000 | 197,600 | -12,400 | 94.1% | 第四紀通信編集アルバイト代 |
| 学会HP運営費 | 1,670,000 | 1,383,972 | -286,028 | 82.9% | HP更新アルバイト代,ドメインサービス,レンタルサーバー利用料 |
| 大会運営準備金 | 380,000 | 380,000 | 0 | 100.0% | 2025年大会 |
| 巡検準備金 | 100,000 | 100,000 | 0 | 100.0% | 2025年大会 |
| 講演会・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ費 | 50,000 | 0 | -50,000 | 0.0% | |
| 予稿集印刷費 | 0 | 0 | 0 | | |
| 学会賞等顕彰費 | 500,000 | 276,500 | -223,500 | 55.3% | 学会賞等賞状作成費 |
| 会議費 | 100,000 | 31,625 | -68,375 | 31.6% | 年間Zoom利用料、Zoom大規模ミーティング利用料 |
| 通信費 | 200,000 | 126,339 | -73,661 | 63.2% | 会費請求書発送費,事務通信費,委嘱状発送費等 |
| 旅費・交通費 | 250,000 | 16,424 | -233,576 | 6.6% | 会計監査交通費 |
| 印刷費 | 350,000 | 216,106 | -133,894 | 61.7% | 封筒作成費,払込票作製費,コピー代 |
| 業務委託費 | 2,300,000 | 2,208,938 | -91,062 | 96.0% | 業務委託費（第1回・第2回・第3回）,会員マイページ関連費用 |
| 領域活動費 | 750,000 | 188,829 | -561,171 | 25.2% | |
| *領域1* | 150,000 | *102,583* | -47,417 | *68.4%* | *11月開催：海洋コア岩相記載武者修行イベント* |
| *領域2* | 150,000 | *43,123* | -106,877 | *28.7%* | *7月開催：能登半島シンポジウム* |
| *領域3* | 150,000 | *0* | -150,000 | *0.0%* | |
| *領域4* | 150,000 | *0* | -150,000 | *0.0%* | |
| *領域5* | 150,000 | *43,123* | -106,877 | *28.7%* | *7月開催：能登半島シンポジウム* |
| INQUA対策費 | 0 | 0 | 0 | | |
| 役員選挙費 | 400,000 | 299,785 | -100,215 | | 評議員選挙発送費用・事務費用,マイページ選挙システム運用費 |
| INQUA対策積立金繰入支出 | 500,000 | 500,000 | 0 | 100.0% | |
| 役員選挙費積立金繰入支出 | 200,000 | 0 | -200,000 | 0.0% | ※選挙開催年のためなし |
| 予備費積立金繰入支出 | 0 | 0 | 0 | | |
| 加盟学協会分担金支出 | 50,000 | 50,000 | 0 | 100.0% | 防災学術連携体,日本地球惑星科学連合,自然史学会分担金 |
| 国際科学技術コンテスト協賛金支出 | 50,000 | 50,000 | 0 | 100.0% | 国際地学オリンピック協賛金 |
| 支払手数料 | 300,000 | 247,437 | -52,563 | | 会費Web決済関連支払手数料（りそな） |
| 雑費 | 50,000 | 34,653 | -15,347 | 69.3% | 振込手数料,名誉会員杉村新先生供花代　等 |
| 予備費 | 300,000 | 0 | -300,000 | 0.0% | |
| 支　出　合　計 | 13,151,200 | 9,802,615 | -3,348,585 | 74.5% | |
| 次 期 繰 越 金 | 18,240,378 | 22,468,530 | 4,228,152 | 123.2% | |
| 合　　計 | 31,391,578 | 32,271,145 | 879,567 | 102.8% | |

日本第四紀学会

## 貸 借 対 照 表
(2025年6月30日現在)

(単位：円)

| 借方 科目 | 金額 | 貸方 科目 | 金額 |
|---|---|---|---|
| 流動資産 | | 流動負債 | |
| 郵便振替 | 3,680,504 | 前受会費 | 2,343,000 |
| 小口現金 | 1,030,019 | 仮受金 | 9,000 |
| 普通預金 | 19,014,160 | 小計 | 2,352,000 |
| 現金(事務局) | 22,256 | 正味財産 | |
| 未収会費 | 2,033,000 | 名簿作成積立金 | 0 |
| 未収金 | 40,591 | 役員選挙積立金 | 0 |
| 固定資産 | | INQUA対策積立金 | 1,000,000 |
| 定期預金 | 10,000,000 | 予備費積立金 | 10,000,000 |
| | | 次期繰越金 | 22,468,530 |
| | | (前期繰越金 | 22,395,078 ) |
| | | (当期収支差額 | 73,452 ) |
| | | 小計 | 33,468,530 |
| 合計 | 35,820,530 | 合計 | 35,820,530 |

## 財 産 目 録
(2025年6月30日現在)

資産の部 (単位：円)

| 科目 | 摘要 | 金額 |
|---|---|---|
| 郵便振替 | 郵便局 | 3,680,504 |
| 小口現金 | 編集書記手許金 | 1,030,019 |
| 普通預金 | みずほ銀行早稲田支店 | 14,271,302 |
| | 三井住友信託銀行本店営業部 | 206,915 |
| | りそな銀行新宿支店（Web決済専用口座） | 4,535,943 |
| 現金 | 事務局手持ち金 | 22,256 |
| 未収会費 | WEB決済分 | 2,033,000 |
| 未収金 | 別刷代・超過頁代収入 | 40,591 |
| 流動資産合計 | | 25,820,530 |
| 定期預金 | 三井住友信託銀行本店営業部 | 10,000,000 |
| 固定資産合計 | | 10,000,000 |
| 合計 | | 35,820,530 |

負債の部 (単位：円)

| 科目 | 摘要 | 金額 |
|---|---|---|
| 前受会費 | 2025年度以降年会費 | 2,343,000 |
| 仮受金 | 不明入金 | 9,000 |
| 合計 | | 2,352,000 |

正味財産の部 (単位：円)

| 科目 | 摘要 | 金額 |
|---|---|---|
| 名簿作成積立金 | 名簿作成積立金 | 0 |
| 役員選挙積立金 | 役員選挙積立金 | 0 |
| INQUA対策積立金 | INQUA対策積立金 | 1,000,000 |
| 予備費積立金 | 予備費積立金 | 10,000,000 |
| 次期繰越金 | | 22,468,530 |
| | 前期繰越金 | 22,395,078 |
| | 当期収支差額 | 73,452 |
| 合計 | | 33,468,530 |

**●資料 3**

日本第四紀学会

会　長　　北村　晃寿　　殿

# ２０２４年度会計監査報告書

日本第四紀学会 2024 年度収支決算報告書（2024 年 7 月 1 日～2025 年 6 月 30 日）の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理 等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2025 年 7 月 17 日

会計監査　藤原　治　印

2025 年 7 月 24 日

会計監査　植木岳雪　印

## ●資料 7

日本第四紀学会

### 2025年度予算案
（2025年7月1日～2026年6月30日）

収 入 の 部　　（単位：円）

| 科　　目 | 2024年度予算額① | 6月30日現在② | 2025年度予算案③ | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|
| 会費収入 | 7,796,000 | 8,747,550 | 7,870,000 | 正会員801名（海外5名含），学生会員23名，終身会員22名，賛助9社（2025年7月1日現在） |
| 正会員会費収入 | 7,596,000 | 8,547,550 | 7,670,000 | 通常会員会費　¥7,074,000 9000円＊786名として（終身会員への区分変更者を10名とする） |
| | | | | 学生会員会費　¥46,000 2000円*23名として |
| | | | | 海外会員会費　¥50,000 |
| | | | | 終身会員会費　¥500,000 10件として（参考：2024年度22件） |
| 賛助会員会費収入 | 200,000 | 200,000 | 200,000 | 20,000円×9社(10口) |
| 誌代 | 600,000 | 309,760 | 600,000 | 定期雑誌購入，Back No |
| 別刷代・超過頁代収入 | 250,000 | 297,231 | 250,000 | 64巻3～4号・65巻1～2号　別刷・カラー代等 |
| 雑収入 | 150,000 | 312,229 | 150,000 | JST(科学技術振興機構) 等 |
| 利子収入 | 500 | 9,297 | 10,000 | 預金利息 |
| 広告料収入 | 0 | 0 | 0 | 2025年大会予稿集広告なし |
| 役員選挙積立金取崩収入 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| INQUA対策積立金取崩収入 | 0 | 0 | 0 | |
| 予備費積立金取崩収入 | 0 | 0 | 0 | |
| 収　入　合　計 | 8,996,500 | 9,876,067 | 8,880,000 | |
| 前 期 繰 越 金 | 22,395,078 | 22,395,078 | 22,468,530 | |
| 合　　計 | 31,391,578 | 32,271,145 | 31,348,530 | |

支 出 の 部　　（単位：円）

| 科　　目 | 2024年度予算額① | 6月30日現在② | 2025年度予算案③ | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|
| 会誌発行費 | 3,301,200 | 2,448,540 | 3,301,200 | 第四紀研究 64巻3～4号・65巻1～2号 |
| 印刷費 | 1,700,000 | 1,030,590 | 1,700,000 | 64巻3～4号・65巻1～2号（J-STAGE掲載費用含） |
| 編集費 | 300,000 | 208,940 | 300,000 | |
| 編集人件費 | 1,201,200 | 1,201,200 | 1,201,200 | 編集書記手当 |
| 別刷印刷費 | 100,000 | 7,810 | 100,000 | |
| 会誌・会報発送費 | 550,000 | 452,233 | 550,000 | |
| 会報発行費 | 800,000 | 791,234 | 800,000 | 第四紀通信32巻3～4号・33巻1～2号 |
| 印刷費 | 500,000 | 502,854 | 500,000 | |
| 編集費 | 90,000 | 90,780 | 90,000 | 第四紀通信編集費（編集ソフト契約料等） |
| 編集人件費 | 210,000 | 197,600 | 210,000 | 第四紀通信編集アルバイト代 |
| 学会HP運営費 | 1,670,000 | 1,383,972 | 170,000 | HP更新アルバイト代,ドメインサービス・レンタルサーバー利用料等 |
| 大会運営準備金 | 380,000 | 380,000 | 380,000 | 2026年大会運営準備金 |
| 巡検準備金 | 100,000 | 100,000 | 100,000 | 2026年大会分 |
| 講演会・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ費 | 50,000 | 0 | 50,000 | |
| 学会賞等顕彰費 | 500,000 | 276,500 | 500,000 | 賞状作成費・副賞・関連費用等 |
| 会議費 | 100,000 | 31,625 | 60,000 | 会場費,Zoomライセンス利用代等 |
| 通信費 | 200,000 | 126,339 | 200,000 | 会費請求書発送費，事務通信費等 |
| 旅費・交通費 | 250,000 | 16,424 | 50,000 | 執行部会・委員会等交通費 |
| 印刷費 | 350,000 | 216,106 | 350,000 | 学会専用封筒，コピー代 |
| 業務委託費 | 2,300,000 | 2,208,938 | 2,300,000 | 事務委託費,会員マイページ関連費用 |
| 領域活動費 | 750,000 | 188,829 | 750,000 | 15万円*5領域 |
| *領域1* | 150,000 | *102,583* | 150,000 | |
| *領域2* | 150,000 | *43,123* | 150,000 | |
| *領域3* | 150,000 | *0* | 150,000 | |
| *領域4* | 150,000 | *0* | 150,000 | |
| *領域5* | 150,000 | *43,123* | 150,000 | |
| INQUA対策費 | 0 | 0 | 0 | |
| 役員選挙費 | 400,000 | 299,785 | 0 | 委員会交通費,選挙会告印刷費,マイページ選挙システム運用費,発送事務局費用 |
| INQUA対策積立金繰入支出 | 500,000 | 500,000 | 500,000 | 学生派遣費用 |
| 役員選挙費積立金繰入支出 | 200,000 | 0 | 200,000 | |
| 予備費積立金繰入支出 | 0 | 0 | 0 | |
| 加盟学協会分担金支出 | 50,000 | 50,000 | 50,000 | 日本地球惑星科学連合,自然史学会分担金，防災学術連携体 |
| 国際科学技術コンテスト協賛金支出 | 50,000 | 50,000 | 50,000 | 国際地学オリンピック協賛金 |
| 支払手数料 | 300,000 | 247,437 | 300,000 | Web決済手数料 |
| 雑費 | 50,000 | 34,653 | 150,000 | 振込手数料等5万円，学会資料電子化学生アルバイト代10万円として |
| 予備費 | 300,000 | 0 | 300,000 | 70周年記念式典 |
| 支　出　合　計 | 13,151,200 | 9,802,615 | 11,111,200 | |
| 次 期 繰 越 金 | 18,240,378 | 22,468,530 | 20,237,330 | |
| 合　　計 | 31,391,578 | 32,271,145 | 31,348,530 | |

## ◆日本第四紀学会 2025 年度第 2 回執行部会議事録

日　時：2025 年 8 月 25 日（月）13:00 ～ 16:00
方　法：Zoom システムを用いたオンライン形式
出席者：北村晃寿（会長）、横山祐典（副会長）、藤原　治（副会長）、齋藤めぐみ（庶務委員長）、納谷友規（会計委員長）、目代邦康（広報委員長）、池原　実（行事委員長）、白井正明（渉外委員長）、長橋良隆（領域 3 代表）、中塚　武（領域 4 代表）、三田村宗樹（領域 5 代表）、鈴木毅彦（70 周年記念事業委員会報告のみ）、須貝俊彦（70 周年記念事業委員会報告のみ）
欠席者：石原与四郎（編集委員長）、加　三千宣（領域 1 代表）、奥野　充（領域 2 代表）
オブザーバー参加：齋藤咲良（事務局：春恒社）

### 1. 主な報告事項

(1) 防災学術連携体総会が 7 月 30 日に開催され、すべての審議事項が承認された。
(2) 日本学術会議 INQUA 小委員会にて、アジア第四紀学会（ASQUA）を 2027 年に日本で開催することを検討するよう依頼された。
(3) INQUA によるプロジェクト支援について会員 ML で周知した。第四紀通信にも情報を掲載する。
(4) 2025-2026 年度評議員会、2025-2026 年度執行部会のメーリングリストを作成した。
(5) 2025-2026 年度評議員、執行部会委員、各種委員に対し、委嘱状を発行した。
(6) オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）からの要請に対し、学会著作物の著作権に関する情報を登録した。
(7) 2025 年度予算案に学会資料をデジタル化するための費用として学生アルバイト代を計上した。
(8) 台風のために昨年の仙台大会に出席できなかった竹村恵二名誉会員を、2025 年島根大会に招待することとし、その旅費ならびに懇親会費を顕彰費より支出する。
(9) 2024 年度決算に対し会計監査を受けた。
(10) 2025 年度の予算案を作成した。
(11)「第四紀研究」第 64 巻第 3 号短報 1 編と総説 1 編を 2025 年 8 月 4 日と 8 月 8 日、特集号（論説 1 編）を 2025 年 8 月 1 日に J-STAGE へ早期公開した。8 月末に向けて特別号 2 編が公開予定である。
(12) 8 月 15 日時点の編集状況は、通常号の受理済み原稿（書評を除く）は 0 編、手持ち原稿は論説 7 編、総説 1、短報 2 編である。
(13) 2025 年 8 月 3 日に第 1 回編集委員会（オンライン）を開催し、新任の方に査読過程の説明および、現状引き継いだ課題等の再確認を行った。
(14) 2025 年大会における若手・学生発表賞審査委員会の編成を行い、各領域から推薦された 5 名の委員（田村　亨、奥野　充、里口保文、中塚　武、山田和芳）で構成することとした。
(15) 2025 年大会の講演要旨集 PDF を 8 月 25 日に公開した。また、大会参加者への注意事項等を同日に会員 ML で連絡することとした。
(16) 第四紀通信第 32 巻第 3 号の編集を行い、ウェブサイトで公開した。
(17) 会員 ML を通じて広報、情報提供等を行った（#1876-1885）。
(18) 日本第四紀学会ウェブサイトを通じて新役員、表彰等に関する情報提供を行った。
(19) 外部機関において代議員ならびに各種委員を務めている下記の委員を、渉外委員会委員に追加する件について、2025 年度第 2 回評議員会に諮ることとした。前杢英明会員（ジオパーク学術支援委員会）、小荒井　衛会員（防災学術連携体、ただし 2026 年 6 月まで）、山田和芳会員（JpGU 教育検討委員）。
(20) 7 月 30 日に開催された防災学術連携体総会に北村会長と小荒井会員が出席した。また、8 月 19 日に開催された「防災に関する学術会議、学協会、府省庁の連絡会」に小荒井会員が出席した。
(21) 11 月 1 日に島根大学で開催される自然史学会連合のイベント（体験教室）への参加の可否について問い合わせがあり、参加を見送ることとした。
(22) 8 月 28 日に開催される本会 2025 年度第 2 回評議員会の報告・審議事項を確認した。
(23) 学会設立 70 周年記念事業委員会より、以下の報告があった。
・開催場所は産業技術総合研究所で、開催期間は 2026 年 8 月 20 日から 22 日までで、250 名の参加を見込んでいる。
・口頭発表は全てシンポジウムで行い、一般研究発表はポスターで行うこととする。シンポジウムは各領域で開催し、所要時間は 3 時間に統一する予定である。
・シンポジウムの企画と合わせて各領域から委員

を選出するなど、LOC および実行委員会のメンバーを増やすことを検討中。
・開催期間中に、地質標本館で第四紀学会に関連した特別展を行う予定である。
・海外からの招待講演、そのための費用などについて検討する。ASQUA2027 を意識してアジア等近隣の研究者を招待することも検討する。
・記念出版物に関しては、学会設立 70 周年大会時には出版済みとなるよう進めている。朝倉書店に出展を依頼し宣伝したい。
・会場の産業技術総合研究所から開催の後援を得た。

**2. 審議事項**

(1) 講演要旨集の取り扱いを検討し、残部のある第 13 号～第 49 号（うち 30 号は欠号）については学会保管分として 1 冊を残すこととした。また、残余の保管分は在庫とし、その在庫数を広報委員会が学会ウェブサイトに掲載することとした。
(2) 第 49 号以前の要旨集については、会長がデジタル化（画像データとして）を行い、著作権および公衆送信権の取り扱いに配慮したうえで、広報委員が学会ウェブサイトに公開することとした。経費は、学会資料をデジタル化するための費用から支出することとした。
(3) 琵琶湖博物館より、2025 年島根大会の授賞式写真を掲載したい旨の申請があり、これを承認した。広報委員会が写真を提供し、クレジットは「日本第四紀学会撮影」とすることとした。許可証は庶務が作成し、回答することとした。
(4) 年会費請求の方法の変更について検討した。2026 年度請求分から以下の実施案とすることを、2025 年度第 2 回評議員会に諮ることとした。請求書発送を 1 回とし、メール配信は従来通り 6 月、11 月、3 月に行う。紙媒体による請求書は、8 月頃（1 回目の請求時期付近）に発送とすることとした。
参考：2024 年度実績は以下の通りである。郵便振込用紙発送に関わる費用として第 2 回請求（11 月）が 59,796 円（453 件）、第 3 回請求（3 月）が 8,844 円（67 件）、別途封筒・払込取扱票作成費は各 1,000 部：77,000 円（在庫数調整のうえ発注）であった。
(5)「第四紀研究」の表紙について、黄色が淡色であるため、デザインの改善を編集委員会にて検討することとした。

**3. 意見交換**

(1) SNS での情報発信について意見交換を行い、非会員に対する情報発信に役立つので実施する方向で進める。
(2) 2015 年に発行したリーフレット「第四紀とは」は在庫がなくなった。リーフレットの作成については前期の執行部会でも要請されていたものであり、領域 5 において作成を進めることとした。

## ◆日本第四紀学会 2025 年度第 1 回通信執行部会議事録

開催期間：2025 年 9 月 3 日（水）19 時 13 分～
10 日 23 時 59 分

下記の件について、日本第四紀学会編集委員会規程第 5 条（特集については，「特集提案書」を編集委員会で受け付け，執行部会で提案受理の判断を行う.）および、日本第四紀学会執行部会規程第 10 条（執行部会では，会長が必要と認める場合には、会合の開催のほかに，電磁的な方法を用いて、審議を行うことができる.）に基づき、執行部会メーリングリストを用いた電子メールで審議し、承認された。

**審議事項**

1. 若手・学生発表賞の審査結果について（池原行事委員長）
若手口頭発表賞：O-27 内田真緒 会員
「大井川上流域の環流旧河谷に残された湖成堆積物の堆積環境の推定」
学生口頭発表賞：該当者なし
若手ポスター発表賞：P-03 吉田一希 会員
「0.5mDEM 地形判読に基づく大山火山の鳥越峠付近における推定火口列の発見」
学生ポスター発表賞：該当者なし

以上

## ◆日本第四紀学会 2026 年大会（創立 70 周年大会）案内（第 1 報）

日本第四紀学会 2026 年大会（創立 70 周年大会）は以下の日程で開催予定です。シンポジウム講演（口頭発表）と一般研究発表（ポスター）で構成します。なお、今後の社会状況によっては、一部変更・中止になることがあります。

日　程：2026 年 8 月 20 日（木）～ 8 月 22 日（土）
8 月 20 日（木）　シンポジウム（領域 1、領域 2）および一般発表（ポスター）
8 月 21 日（金）　シンポジウム（領域 3）及び一般発表（ポスター）
2026 年日本第四紀学会総会、記念式典・会長講演、学会創立 70 周年記念パーティー
8 月 22 日（土）　シンポジウム（領域 4、領域 5）および一般発表（ポスター）

会　場：国立研究開発法人 産業技術総合研究所 つくばセンター共用講堂（茨城県つくば市東 1-1-1）
開催方法：完全対面方式（一部ハイブリッド形式）を基本とします。
大会実行委員長：藤原　治（産総研）
委　員：吾妻　崇（産総研）・納谷友規（産総研）ほか
学会設立 70 周年記念事業委員会（特別委員会）
委員長：鈴木毅彦（東京都立大）
委　員：池原　実（高知大）・須貝俊彦（東京大）・山田和芳（早稲田大）ほか

## ◆日本地球惑星科学連合 2026 年大会（JpGU2026）のお知らせ（第 1 報）

日本地球惑星科学連合 2026 年大会は AGU との Joint Meeting（JpGU-AGU Joint Meeting 2026）として、2026 年 5 月 24 日（日）～ 5 月 29 日（金）の 6 日間の日程で、現地（幕張メッセ）とオンラインによるハイブリッド形式にて開催されます。例年通り、宇宙惑星科学、大気水圏科学、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命科学、教育・アウトリーチ、複数領域の 7 つの一般カテゴリーに加えて、一般市民参加者向けのパブリックセッション、全分野に関する話題を取り上げるユニオンセッションなどが企画されています。なお今回すべてのセッションは、AGU とのジョイントセッションとして扱われ、原則として英語が主要言語となります。

日本第四紀学会ではこれまでと同様 に、「第四紀：ヒト―環境系の時系列ダイナミクス」を単独で、「活断層と古地震」を他学会と共同で主催して、セッション提案をおこないます。ほかにも第四紀に関連するセッションが多数提案される見込みです。会員の皆様の参加をお待ちしております。

大会に関する詳細は、https://www.jpgu.org/meeting_j2026/ をご覧ください。

【大会の概要】
開催日時 :2026 年 5 月 24 日（日）～ 5 月 29 日（金）
開催形式 : ハイブリッド（現地 + オンライン）
現地会場 : 千葉県千葉市幕張メッセ

●口頭発表
口頭セッションにて現地で、あるいはオンラインから Zoom 経由でライブ発表

●ポスター発表
オンライン掲示が必須、現地での発表は任意
現地でのコアタイムは原則全日 17:15 ～ 19:00
オンラインポスターセッション（コアタイムに相当）は実施せず

【今後の主な日程】
開催セッション公開：2025 年 11 月 26 日（水）
コマ割公開：2025 年 12 月 10 日（水）
投稿受付：2026 年 1 月 15 日（木）～ 2 月 17 日（火）17:00　　※早期締切 2 月 5 日（木）

## ◆守屋以智雄名誉教授のご逝去を悼む

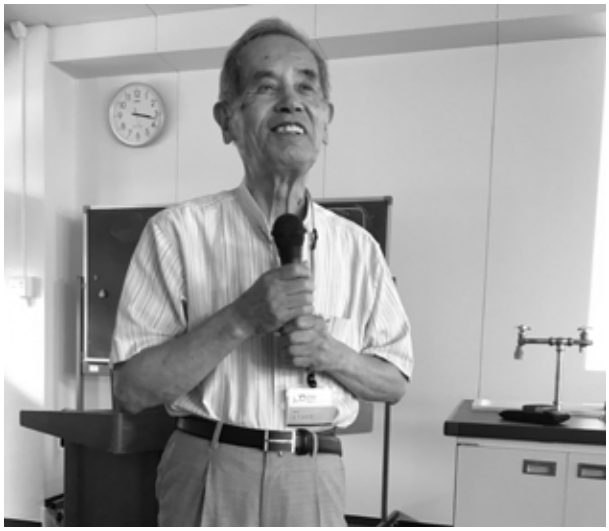
奥野　充（大阪公立大学）

本学会正会員の守屋以智雄名誉教授が、2025 年 6 月 26 日に永眠されました。88 歳でした。守屋先生は、1937 年東京生まれ、1961 年に東京大学理学部を卒業され、1966 年に東京大学大学院理学系研究科博士課程を満期退学されました。1966 年に愛知県立大学文学部講師、1972 年に駒澤大学北海道教養部助教授、1980 年に金沢大学文学部助教授、1989 年に同学教授に昇任され、2002 年から金城大学社会福祉学部教授も務められました。1977 年に博士論文『日本の第四紀火山の地形発達史』を東京大学に提出して、理学博士を取得されました。2002 年に金沢大学から名誉教授の称号を授与されています。主な著作物として、『日本の火山地形』（守屋，1983）、『火山と地震の国』（中村ほか，1987）、『火山を読む』（守屋，1992）、『世界の火山地形』（守屋，2012）などがあります。

守屋先生は、日本における火山地形研究の第一人者として長きにわたり活躍されました。東京大学入学時には、西洋史を専攻しようと考えられていたと伺ったことがあります。しかし、火山に魅せられ博士論文まで一貫して火山地形の研究を展開され、『日本の火山地形』として出版されています。美しい地形分類図や鳥瞰図（スケッチ）がたいへん印象的で、その後の出版物にも同様の図がたくさん掲載されています。ここまでの研究は主として空中写真を活用したものでしたが、世界の火山地形の研究へと拡大・発展されるにあたり、地形図を利用する方向に舵をきられ、アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア大陸、ハワイ・カナリア・アゾレスなどの火山島の地形図を大量に収集されました。しかし科研費などの校費での支払いや軍事機密の関係などで、たいへんご苦労されたとのことです（守屋，2002）。

私が金沢大学大学院に進学した 1992 年は、ちょうど『火山を読む』が刊行された直後で、研究室でコピーを貼り合わせた地形図に判読した地形図を書き込む作業を嬉々として続けられていたことを思い出します。『世界の火山地形』は、苦労して収集された世界各地の地形図に Google Earth による衛星画像をふんだんに取り入れられることで完成させられました。なお、『火山を読む』に先立って『火山と地震の国』が同じ岩波書店から出版されており、日本各地の火山と地震についてたいへん興味深い内容が並んでいます。

私の修士論文について守屋先生が提示されたテーマは、メキシコの単成火山群、あるいは水蒸気噴火を中心とした小規模噴火という 2 つのまったく異なるテーマでした。当時、あまり研究されていないということで着目されたようです。あまり研究されていないということは、研究遂行に困難があるであろうが、逆に比較的容易にオリジナリティーが得られやすいというのが守屋先生のお考えでした。私は、白山や乗鞍岳に連れていっていただき、様々な水蒸気噴火による類質テフラを観察する機会を得ました。そうするうちにその認定に目処がたつようになり、修士論文のテーマとすることにしました。研究手法としては放射性炭素（$^{14}C$）年代で噴火年代を決定する際に，炭化木片だけでなく，系統的に採取できる土壌試料に着目した研究に取り組むことになりました。博士課程では当時，最新鋭の加速器質量分析計（AMS）が稼働していた名古屋大学に進学しました。金沢大学だけでなく名古屋大学への進学時にも周囲の先生へのご挨拶に付き添っていただきました。



国際火山噴火史情報研究集会 2018-1 で講演される守屋名誉教授（2018 年 7 月 21 日、ふじのくに地球環境史ミュージアム、奥野撮影）

守屋先生は、火山地形を中心としつつ、頻度の高い小規模噴火も火山を理解する上で重要であると認識され、さらに防災・減災にも資するとも考えておられました。1 万年噴火史からみた中長期的噴火予測をまとめて、書籍を刊行しようと意欲を持っておられました（守屋・奥野，2018）。これは、噴火予測に役立てるため、火山噴火の規則性を見出そうというものでした。残念ながら、このテーマは出版には至りませんでしたが、今後、守屋先生のご遺志を実現したいと考えています。『最新 地学事典』に「溶岩原」の項目を入れるため、お電話でその定義について伺ったのが、守屋先生

との最後のやり取りでした。COVID-19 の影響も徐々に解消し、私も福岡から近くの大阪に異動してこれからという時に亡くなられてしまい誠に残念です。もう一度、お会いして直接お話ししたかったです。ご冥福をお祈りします。

引用文献

守屋以智雄（1983）日本の火山地形．UP Earth Science，東京大学出版会，135p.
守屋以智雄（1992）火山を読む．自然景観の読み方 1，岩波書店，166p.
守屋以智雄（2002）私が集めた岩石・地形図．金沢大学資料館だより，No. 20，2-3.
守屋以智雄（2012）世界の火山地形．東京大学出版会，299p.
守屋以智雄・奥野　充（2018）1 万年噴火史からみた中長期的噴火予測：火山噴火の規則性について．国際火山噴火史情報研究集会講演要旨集，2018-1，55-60.
中村一明・松田時彦・守屋以智雄（1987）火山と地震の国．岩波書店，338p.

## ◆ 2026 年日本第四紀学会学会賞・論文賞等の推薦のお願い

2026 年日本第四紀学会学会賞、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会若手学術賞並びに日本第四紀学会論文賞（論文賞）、日本第四紀学会奨励賞の受賞候補者の推薦募集を行います。2026 年 6 月頃に開催される評議員会で受賞者決定、2026 年大会で表彰予定です。会員のみなさまからのご推薦をお待ちしております。推薦にあたっては、「日本第四紀学会顕彰規程」及び関連する内規（https://quaternary.jp/about/rule）をご参照ください。過去に受賞した会員は、論文賞を除き同じ賞を受賞することはできませんので、歴代受賞者（https://quaternary.jp/about/honorary/）をご確認ください。その他、詳細は学会ウェブサイトをご覧ください。

★★★　情報をお寄せください　★★★

日本第四紀学会では、第四紀通信のほか、メーリングリスト（ML）、学会ウェブサイトを用いて情報発信をしております。メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス（jaqua-koho@quaternary.jp）へご投稿ください。

情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。ML へのご投稿についての詳細は、第四紀通信第 29 巻第 4 号の巻末をご覧ください。当該号はウェブサイト（http://quaternary.jp/old/report/QRNL2904.pdf）でも閲覧可能です。

第四紀通信には主催・後援イベントなど学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報を、ウェブサイトには主催・後援イベントなどのほか「公募・助成」情報等を掲載します。

広報委員会

日本第四紀学会事務局
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号　新宿ラムダックスビル
株式会社春恒社　学会事業部内
E-mail：daiyonki@shunkosha.com　電話：03-5291-6231　FAX：03-5291-2176